

---

# 魔法少女リリカルなのは 転生した少年は少女達を護る

碧羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生した少年は少女達を護る

### 【Zコード】

Z5627T

### 【作者名】

碧羅

### 【あらすじ】

事故で死ぬ人の代わりに死んでしまった少年  
そんな彼の前に現れたのは死神の少女！？  
え？心は天使だって？どうでもいいわ！！  
新しく命を貰うことになったが行き先はなんとルーレット  
しかも結果を見る前に転生とか…  
もう好きしてくれ…

## 第一話 はじめまして、やよいな

番線に電車が参ります。白線の内側までお下がり下さい。  
繰り返します

駅でアナウンスが流れる。

言われた通り白線の内側 と言つても元から白線の外側にいない  
が まで下がる。  
ふと隣にいた女性と目があつた。  
とりあえず会釈すると女性も会釈を返してきた。

(綺麗な人だな…)

素直にそう思つた。

整つた顔立ちに長い黒髪、きつちり着こなしたスーツ。

(これから仕事かな?)

まあかく言う自分もこれから学校なのだが。  
そうだ、学校に着いたら友達に自慢してやるつ。  
もちろん脚色をつけて。

そんなことを考えいると電車がすぐそこまで来ていた。  
あと数秒もすれば自分の目の前まで来るだろつ。

そんな時だつた。

隣にいた女性が前に出た。

待ちきれなかつたとかそんなんぢやない。

女性の上半身は確実に電車に当たる場所にあつた。

誰かに押されたんだろう。

彼女自身も驚いた顔をしてる。

このままだと人間のジャムが出来上がる。

もう誰も間に合わない。

皆呆然として彼女を見守つた。

……何をしているのだろう。

気がつくと自分の手は彼女の手を握り、引き寄せていた。  
からうじて電車が来る前に引き寄せる事に成功した。

が

今度は自分が彼女の立場になつていた。

力の反動といつやつだ。

自分でも無意識にやつていたために下半身に力が入つてなかつた。

横を見た。

電車の正面が目の前に広がつて



## 第一話 IJの経験のおかげで今や電車嫌いになりました

「…………あれ？」

『気がつくと駅のホームにいた。  
ちゃんと田線の内側にいる。

夢？

田舎夢とこいつやつか？  
いやはや嫌な夢を見たもんだ。  
ひとつと学校行つて寝直「夢じやないですか～」やべえ口に出して  
たっぽい。気をつけなければ……って

「…………夢じやない？」

「いいえ。ケフイアです」

そんなネタ期待してねえよ。

「聞かれたら言いたくなりません？」

なるけど。

いやそれよりも。

「なぜ夢じやなこと決める

夢で助けた女性のポジションは真っ黒のワンピースを来たツイン  
テール娘がいた。

俺の口り魂に火がついた！

「IJの口つコン」

「最高の讃め言葉だ」

可愛いには正義。異論は認めない。

そんなことは置いといて。

「まあ先ほどの答えですけど、あなた死んからなんですよ」

「IJの口りは何を言つてるんだ？」

..... what?

「あなたが夢だつて言つたのは現実で、私は俗に言つ死神だと言つてるんです」  
「までまでまでまでまで！死神だと…？聞いてないぞ…！」

「聞かれてませんもん」

「普通聞かねえよ…」

「あ！安心して下さい。心は天使の様に慈悲に溢れていますから…」  
「じゃかましい…！」

「じゃあなんだ？さつきのは夢じゃなくて現実で、俺は死んだつてことなのか！？」

「さつきからいつまつてゐるじゃないですか」

「かちよくかちよく心読まれてるし…」

「つてことは」「は？」

「三途リバー」

「川じゃねえええ！…」

「あ、そっちですか」

確かによくよく見ると俺達以外誰もいないし駅の外は真っ白で何もないし！

ああ思い返せばあんなことやこんなこと……あれ？  
何故、だらう青春した思い出がほとんどない。

学校に行けばヲタ友達とティープな会話したり家に帰ればパソコンの前でアニメ見てゲームして……

「ろくな人生歩んでもせんね」

「つるせえ！…」

どちらにせよこれでおしまいか……せめて親孝行ぐらいはしたかったな。

「言い忘れてたんですけど生き返れますよ  
なん……だと？」

「正直な話ここにくる人つて本当はあなたが助けた女人の人だつたんですよ。それなのになんてあなた自分で寿命縮めて……バカなの？死ぬの？」

「もう死んでます」

「そうでした」

「バカはこいつでした。」

「とにかく、俺は生き返れるんだな？」

「条件付でナビね」

「条件?」

「はー。えーと……

其の一 回じ世界には生も返れない

其の一 輪廻転生に基づき生まれ変わる

ですね

「要するに別世界で生まれ変わると」

「YEH」

まあ悪くないな。

親や友達に会えなくなるのは寂しいがこんな死に方不本意だし。

「それじゃ」れ持つてトトセー」

「……ダーツ?」

ガラガラガラ……

なにやら車輪が回る音がするのとその方向を見る。

なんか自称死神の口りがでかいルーレット持つて来てた。

え?なんかいきなり回し始めたけど?

「ああー早く投げてーーー」

「え?あ、ああ」

言われた通りに手元にあるダーツを投げる。

一応当たつたもののまだ回転してるのでどこに当たつたのか分から

ない。

それなのにこの口つ死神は

「はい！転生先が決まりました！」

「今ので！？」

「それじゃ凛々狩る本気狩る頑張つてください！…」

「なにそれ怖グフ…！」

今度は体当たりされて白線の外側に出来る。

一瞬の浮遊を味わうと共に聞き覚えのある甲高い音が聞こえた。

電車だった。

首を90度曲げると自分をこんなにあわせた電車が田の前にあつた。

ああ、決めたや。

一度と電車に乗るもんか

## 第一話 IJの経験のおかげで今や電車嫌いに（後書き）

ここでプロローグは終わりです

気まぐれで更新するのでなにとぞご容赦を

次回、無印編はじまります

第三話 無事転生！ え？ それだけだけなのにか？（前書き）

章はパソコンでしか作れないことに俺涙田

しかたないんでこのままこきます

## 第二話 無事転生！ え？ それだけだけどなにか？

もすもすひねもす～。  
死んで転生した人だよ。  
終わり！

すまんなかったことにしてくれ。  
ちょっとしたネタのつもりだつたんだ。  
いざやってみるとめっちゃ恥ずかしいわこれ。

「シズ～、これ教えてくれ～」

「さつきの方程式を使えば楽だよバカ兄」

あ、シズつて俺の名前ね。

橋 司守。  
たちばな しゆ

私立聖祥大附属の小学校に通う二年生。  
まあ頭は高校生並みなんだけど。

そこ、バーロー言わない

「やべえよシズ… なんで小学生なのに分かるんだよ…… 天才だろ」  
「あんたこそ高3の癖になんで中1の問題分かんないんだよ」

この俺の田の前にいるバカは橘たちばな 博士ひろし

一応俺達の兄貴分。

『俺達』ってのはこの『家』にいる全員ってことね。

この家 橘院は孤児院なのだ。

身寄りのない子、捨てられていた子。  
そんな子供がここにはたくさんいる。  
自分もその一人らしい。

なんか捨てられてたらしいけど覚えてないからなんも思わないし。

でもどうせなら人助けが趣味のケーキ屋のお姉さんに拾つて欲しかったな。

二回死ねが口癖のツンデレ幼なじみがいると余計嬉しい。

「あ、バカ兄またシズに勉強教えて貰つてんの？」

「最年長の威厳ないね」

「バカ兄マジバカ」

「うるせえ！バカって言った方がバカなんだぞバカア！！」

「バカ兄……（慈愛の視線）」

因みにバカ兄というあだ名だが、最初は博士って名前から『はかせ』って言われたんだけどあまりにもバカなんで俺が『バカセ』って言つたらいつの間にかバカ兄になつてた。

にしてもだ。

まさか記憶までそのままで生まれ変わるのは思わなかつた。  
流石に生まれた時は覚えてないが。

おかげでバカ兄に勉強を教えられるし（嬉しくない）、学校では結

構モテるじ（じゅぢは嬉しこ）。

こらそー。ロリコン言わない。

流石に小学生に手は出さんよ。

五年後十年後に期待してると。

「さてと……」

「待てー待つんだシズー！俺を見捨てないでくれえええー！ー！」

「俺が帰つてくるまでにこれ終わらせと。答えは母さんを持つて  
るから」

ドンッヒー〇〇〇の束を机の上に置く。

「おー」

勉強道具をカバンにしまつ。

「兄貴を置いて女の子ヒートートとは……なんてヒドい弟だ」

「いくら教えても学習しないなんて……なんて（頭が）ヒドい兄だ」

後ヒートージやないし。

勉強教えに行くだけだし。

「じゅ、行つてぐるよ

「おーい」

気の抜けた返事で送られた。

イラッときたがこれ以上イジメるとかわいそうなので止めといた。

家を出る。

その時はまだあんな事件に巻き込まれるなんて、微塵も思いもしなかつた。

「あれ? フラグ立てた?」

「いやまー、珍しいバー玉だ」と

目的地に進む途中、普通よりも一回り小さいサイズのビー玉が落ちていた。

それを踏んでタンゴが出来たのは秘密だ。

それからいよいよ

これがまた不思議で見る角度光の三で加洞で色が変わることでい

「お！ おお～。すげえ！！」

端から見ればまるで不審者のごとく体を大げさに動かしてビー玉の色を変えている。

とまあそのビー玉を上に投げて遊んでいると

「いやー、いい拾い物し「れやあー」あべしー。」

誰がぶつかり、ビー玉が口の中にダイブ。

ゴクン。

ゴクン？ゴクン！？

「はーせー！」

もしかしてわ、他のバーで玉飲んじゃったー？

必死に周りを見渡すがビー玉らしき物は見つからない。  
ということはもう闇の中……？

「なに今の声！？」

「なのまちせん! どうかしたの?」

なんか金髪と青髪が来たけど気にしない。

両手を地面につけて吐き出すとする。

『 』

「アリナちゃんがいいんだ

「イ、『H』、『H』、『ヤ』、『ヤ』、『ヤ』

「なほ、すずか、通報しましょ?」

「らはせは  
アリサキ  
ハ落ガ着シハ」

くそ！出ない！

傳刀がい三を究め 這むに力

「あの～

でも痛いよな。

ほつとけばつ　ひとと一緒に出てこないかな？

「あの～」

そうだな、それに期待しよう。

念のため病院に「あの～」「はい～」考へ事してて気づかなかつた。

ついつい大声出しちゃつた。

「……ってシズくん？」

「ん？あー、なのは……だつけ？」

「うん。高町なのはだよ」

立ち上がって声の主の方へ向くと茶髪の短いツインテール娘　高町なのはがいた。

個人的にはツインテールはもっと長い方が好きなのだが。なのはのやや後ろにはアリサ・バニングスと月村すずかがいる。さつきの金髪と青髪はこいつらか。

「わりい、クラス違うからよく覚えて無かつた。そこのツインテレ以外

「誰がツインテレよ！」

「自覚がある時点で自分だと気づけ」

ツインテレもといアリサは俺をライバル視（敵視？）している。

何故だろ？なんて言つほど鈍感じやないぜ。

俺とアリサは入学してからずっと100点しか取つてない。

その上俺の方が運動神経がいいからプライドの高い彼女は悔しいのだ。

前世の記憶を受け継いでるだけなのに……。（享年17歳）  
男子だから運動神経いいだけなのに……。

「えーと、それより大丈夫？」

「え？」

「なにか大変だったんじゃないの？」

……………あ。

「……じゃった」

「え？」「めんもう一回呟つて」

「……飲んじゃった」

「なにを？」

「……ビー玉」

「ビー玉？」

「もしかしてわざわざぶつかつたとき？」

俺は無言で首を縦に振る。

「それって大丈夫なの？」

「こいつなら大丈夫でしょ」

アリサてめえ。

「ごめんシズくん！私のせいで」

「いや、俺の不注意のせい……」

「来て！」

いきなりなのはに引っ張られる俺。

てか痛い痛い！！

本当に小学3年かこいつ！

「「めん…すずかちゃん…アリサちゃん…また明日…」」

浮いてる…俺浮いてる…

引っ張られて人が浮くなんてアニメか漫画でしか見たことないぞ…？

「ぬわーーつつ…」

某父親の叫び声をあげながら引っ張られること数分。

何故か喫茶店の前で停止。

「お母さん…お父さん…面…」

ああ、両親がここで働いてるのね。

といつかお客さん驚いてこいつを見てるよ。

「どうしたのなのは？大声出して。お客さん迷惑よ

「う…「めんなさい、お母さん」

お母さん…？この人が…？若っ…！

「あら、その子は？」

「そ、そうなの…実はかくかくしかじかで…」

「そう…困ったわね」

伝わるのか。

便利だなかくかくしかじか。

「多分大丈夫よ。その「つか便」と一緒に出てくれるわ。保険証は持つて  
る?」

「いえ、持つてません」

「それじゃあお家に帰つたりお母さんかお父さんに病院に連れてもらつて」

「はい」

「「ごめんなさいね、うちのなのはが」

「自分の不注意でもありますから気にしないでください」

「礼儀正しい子ね~。お詫びに好きな物食べて。なのはも何か食べ  
ていきなさい」

「え?いや、でも……」

「ほんとー?ありがとーお母さんー・シズくん、あそこ座るー。  
「ちよ、ま……」

「お母さん、私シヨートケーキー!」

「はいはい、シズくんは何がいい?」

「……同じもので」

「これはもう折れた方がいいな……。

なのはのお母さんは注文を取ると厨房の方へ向かつた。

息を吐きながらイスに体重を乗せるとなのはが「うちを見ている  
に気づいた。

「……何?」

「え?あ、えつと……「ごめんなさい」

「ビー玉の事ならもう怒つてねーよ」

「それもあるけど……いかなり連れて来て迷惑だったかな、って……

「……」

あー、そつひ。

「別に氣にしてないつて。そつや いきなり連れてこひれでびつくつ  
したけべれ」

「本町にへ。」

「本町に」

「……えへへ、あつがとつ」

なんだよ……笑ひと可憐こじやなこの。

しづりくしてケーキと頼んないのに紅茶が運ばれて（サービスらし  
い）なのせとの会話を楽しんだ。

それからしづらへたひ、夕方になつ店を出ゆつた。

「本町に金はここんですか？」

「ええ。まつたでしょひ、お詫びだつて」

「……あつがとつ」わこまわ

「いいのよ。またお店に来てね」

「バイバイシズくん」

「ああ。またな、なのは」

別れの挨拶をしてこの場を去る。

そして歩くこと数分、あることを思い出した。

「さういや、あの子の家行くの忘れた……」

怒ってるだらうな……。

しゃーない。明日やつさの喫茶店でケーキ買って行くか。

そう思いながら俺は帰つていった。

## 第四話　「」の「」と「」の「」

なのは登場ー！

こんな感じで合ひでますかね？

今回やたらー や? とか…… が多かつた気がするナビ

次回から「」無印始めて行きまー！

…… 分

## 第五話 続かない日常

家に帰る途中、商店街の中で意外な人物と出会った。

いや、よくよく考えると意外でも何でもないな。  
むしろ居て当然のような気がしてきた。

「母さん」

「あら司守、今帰り？」

この人は我らが橘院の責任者でありみんなの母親。

橘 梢枝じゅくえい

たつた一人で橘院総勢17人の面倒を見るスーパーウーマンだ。  
晩飯の材料を買った帰りなのかスーパーの買い物袋を両手に持つて  
いる。

「うん。今日の晩飯は？」

「カレー」

「マジで？やつたね」

小さい方の買い物袋を母さんの手から取つて持つ。

「カレーはたくさん作つて置けば2、3日は楽出来るからね  
「知つてるけど言われると何だかな……」

まあ母さんも大変だしな。

そんな他愛ない会話をしながら帰る。

「お母さん、司守、お帰り」  
「ただいま。バカ兄は？」  
「居間でダウン中。ミッショント失敗」  
「OK、スクラップの時間だ」  
「ほじほじにしどきなさいよ……」  
「お母さん、晩御飯手伝うよ」  
「ん、ありがと」

報告にあつた居間に行く。  
するどどりでしよう。

机の上の紙の束は一枚も減つておらず、意識は夢の世界に旅立つて  
いるではありますか。

つたく……しかたないな。

「最年少ブラザーズ！！」  
「ヘイツ！呼んだかいシズ兄！」  
「なんでも任せてくれ！」  
「彼の者の動きを封じる縄と審判の羽根を……」  
「合点承知！」  
「心得て候！」

すぐに行動に移す最年少ブラザーズ。  
あれで小学1年生つていうのが恐ろしい。  
なんでその年で承知とか候とか知つてんだよ。

しばらくして最年少ブラザーズが持つて来たのは縄跳びと羽根付き  
のペンだった。

「十分。その縄で動きを封じ、足の装甲を剥ぐのだー。」

「御意ー。」

「イエス、マイローダーー。」

だからどーいでそんな言葉を覚えた。

縄跳びでの拘束をしても起きないバカ兄。  
よろしく。トドメだ。

「その命、神に返しなさい」

「むう、なんかくすぐつたい……ってなにこれ！？動けにやああ  
ああーー？ちょ、シズ、らめえええええーー！」

「晩御飯になるまでつー君をくすぐるのをつー止めないーー！」

「あはははははーー？マジで止めてええええーー！」

「それが逆にいいんだろ？」

「ほら、ここがいいのか？」

いつの間にか最年少ブラザーズまで参加してゐるし。  
この子達の将来が心配だ。

（～一時間後～）

「（）飯出来たよー」

「ふう、いい汗かいた」

「働いた後の飯は楽しみだな」

（）のオッサンだ最年少ブラザーズ。

しかたないので縄跳びを解こうとしたすると

「うわあ……」

バカ兄がアヘ顔してた。  
気持ち悪かった。  
放置した。

その後は全員（-1）でカレーを食べて、風呂入って、何故か他の姉弟達も入つて来て、すぐに上がって、宿題を終わらせて。

刺激はないけど、俺はそんな日常が好きだった。  
ずっと続けばいいと思ってた。

大学生や就職するとみんな迷惑をかけないようになって出て行くけど、俺はここを継続かなつて思う。  
大変だろうけど何時までも母さんに頼れる訳じやないし。  
今更だけどあの口り死神に感謝したくなつたな。

そんな小学生らしくない事を考えながら眠りについた。

だがそんな日常も如くは続かない。

夢を見た。

同じ年ぐらこの少年と化け物が戦つてゐる夢。

その非日常は彼にとって良いくことなのか悪いことなのかは、まだ分  
からない

## 第六話 関西弁のキャラって良キャラが多い気がする（前書き）

ジヨーカーしかりけ口ちゃんしかり

分かるかな？

## 第六話 関西弁のキャラって良キャラが多い気がする

学校帰り。

片手には翠屋で買ったケーキ。

向かうは我が家とは別の方角。

て言うかもう着いた。

田の前にあるのは二階建ての家。

ピンポン

……出ない。

ピンポン、ピンポン、ピンポン

何度もチャイムを鳴らしてもこの家の主は出て来ない。  
まさか居ないのか？

いや、きっとこの前行けなかつたからいじけてるに違いない。  
困つたやつだ。

「居るのは分かつとるんや！大人しゅう出てこんか！…  
「質の悪い借金取りみたいな事すんなアホー！…」

バシイイン！と後ろからハリセンで頭を叩かれた。

「何だいるじやないか」

「図書館に行つてただけやアホ」

後ろを振り向くと車椅子の少女が呆れた顔でこっちを見ていた。

あれ？ハリセンは？

「おいアホないだろ。誰がお前に勉強教えてやつてると思つてるんだ」

「うう……」めんなさい

分かればよろしい。

「ほら、ケーキ買つてきたから食おうぜ。お茶煎ってくれ」

「ほんま？ほなすぐ煎れるから入つて」

「おう。邪魔するよ」

俺を横切つて家の敷地内に入る少女。

この少女が大きな家の主でありたつた一人の住人　八神はやて。

俺達が出会つたのは最年少ブラザーズが風邪を引いて付き添いで病院に行つたときだ。

待合室で診察が終わるのを待つていると、同じくらいの年の女の子が車椅子に座りながら読書をしているので話し掛けでみたのがキッカケだつた。

年も同じだつたからすぐに仲良くなれだし、家が割と近くだつたら休学中の彼女に勉強を教えることも出来た。

「ほら、ショートヒショート、どっちがいい？」

「それじゃ、こいつの……ってどっちも同じやん！」

彼女の両親はいない。

今は父親の友人の庇護を受けて生活してゐるらしい。つまり、俺が家に来ない限り一人でいることになる。だからなるべく行くようにしてゐるが何分俺にも用事がある。

学校行つたりバカ兄に勉強教えたり家事を手伝つたりバカ兄に勉強教えたり……。 教えたりバカ兄に勉強教えたり……。 段々バカ兄に殺意沸いてきた。

「はあ……」

「どないした?ため息なんてついて」

「ちょっと俺の生徒の頭が酷すぎて……」

「悪かつたなバカで!」

「はやてじやねーよ。ウチのバカだよ」

「ああ司守くんのお兄さん?大変やね、年上に勉強教えるなんて」

「まあな」

バカで通じるとかすごいな。

流石バカ兄。同情するぜ。

それからケーキを食べ終わつた後勉強を始めた。

勉強って言つても所詮小学生レベルなもんで教えるのも楽だ。

最もはやはては物覚えがいいからどこまで楽できるか分からなが。

そしてあつといつまに時間は過ぎて

「そろそろ帰なんないとな」

「もうそんな時間?もうちよつとゆつくりできたらええにな

そうできたらいいのにねえ。

前に連絡するの忘れて遅くまでいたら鍵を閉められててしばらく夜の冷たい風を味わつたからね……。

そんな訳で一緒に晩御飯を食べようとか泊まろうとかしない場合は暗くなる前に帰つている。

「悪いな」

「うん、気にしちゃうよ」

そう言つてはやては笑う。

いつもの そう、いつもの悲しい笑顔。

俺が帰るときはいつもこの笑顔だ。

だから俺は手を頭の上に乗せて、いつ

「じゃあ、またな」

「……うん」

そうしてちゃんとした笑顔を見せる。

手を離して家を出た。

また明日来よ。

明日が無理なら明後日、明後日が無理なら明明後日来よ。

一日でも多く会えるように。

はやての笑顔がみれるように。

ああ、俺はきっとはやてが好きなんだなって思いながら帰路についた。

第七話 チート?いやいらぬこと ハマジでこらねいからむか?この必要ないか?

公人主  
チート覚醒

## 第七話 チート?いやいらぬ?トマジでいらぬ?からハハハの必要ないか

俺は今神社にいる。

何故かつて?そこには神社があるからね。

違うけど。いや違わないけど。

はやての家から帰る途中に神社がある。  
俺はいつも長い階段だなー、って思いながら帰ってるんだけど今日  
は違う。

その長い階段を上つていった。

ああ長かつたさ。小学生にはキツいよこれ。  
下りもあるとか鬱になるよ。

それよりも理由だが一つある。

一つはビー玉。

出ないんだよなかなか。

医者の話しじや時間かかるつて言つてたけど不<sup>ハ</sup>舛<sup>ジ</sup>じゃん。  
だからせめてもの神頼みとこいつこと。

もう一つは幻聴だ。

はあ?なに言つてんの?バカなの?死ぬの?とか思つて<sup>ハ</sup>いる奴もい  
るだろ?。

事実なんだ。本当なんだ。

昨日学校帰りに公園の近くを通つた時と夜にくつろいでいた時<sup>ハ</sup>。  
助けて……助けて……つて聞こえるんだぜ?  
ホラーだぞ。

てな訳でお参りに来たのだ。

ホラ、俺って死神と会ったことあるじゃん？  
だからほかの神様の加護も得られるかなーって。

賽銭箱に五円玉を放り投げる。

一度賽銭箱についてる縦棒に当たって入った後一礼一拍手一拝。

ビー玉が早く出ますように、幻聴が聞こえなくなりますように。  
あと家内安全と無病息災を祈つてつと。

さあ帰ろうと振り返ると

犬がいた。

大きな犬だ。大型犬よりも何倍もデカい。

そもそも本当に犬かどうかも怪しい。

足下には悲鳴も上げられなかつたのか、女性が倒れている。

「…………え？」

そんな状況の中、声を上げてしまつた。

当然ほかの雑音などで遮られることなくその声は犬に届いてしまつ。  
犬がゆっくりとこちらを向く。

ヤバい！！

4つの目が自分を捉えた瞬間、素直にそう思い林に向かつて走り出した。

ただ走つた。

ただ無闇に走つた。

ただ逃げたいから走つた。

ただ生きる為に走つた。

しかし小学生と獣の速さは比べるまでもなく、すぐに追いつかれた。

「！」

先程まで背中を向けていた相手はすでに目の前いる。

その巨大な体。4つの目。鋭い爪。牙の生えた顎。

恐怖が身体を支配し、微塵も動けずにいた。

死。

その単語が脳裏に浮かんだ。

死？死ぬのか？また死ぬのか？

ふざけるなッ！俺は死ぬために生き返ったわけじゃない！！

俺は今の暮らしが好きだ。生き返る前よりもずっとすっと大好きだ

！！

だからこんなところで死んでたまるか！！

そう決意する。だが無駄だと知る。  
いや分かっている。

あんな化け物に人間が、しかも子供が対抗できるわけがない。

生と死。執着と諦め。決意と失望。  
それらが交錯した刹那

“つきながらだくめき”

“謳”が聞こえた。

どこかで聞いたことがある謳だ。

どこだ？漫画か？小説？アニメ？

少なくともテレビや友達との会話ではない。

自問自答している間にも謳は続く。

“艶なる息おきそこに”

不穏な気配を感じ取ったのか化け犬が襲いかかって來た。

“契り籠こん！！”

謳が終わり“姿”が現れる。  
同時に謳の正体を思い出した。

「ギャー！」

壁が化け犬の攻撃を防ぐ。いや、それは“円盤”だった。

“一枚の円盤”が壁の様に田の前に浮いている。

円盤と自分の間には長い棒がある。

それに触れようとして

「ちょっとアンターなにボーッとしてるのヨー。」

「うおー！」

喋った。

まあ俺の予想通りなら喋って当然なんだけど。

「えーと、チルルでOK？」

「そうなのヨ。分かつたならひとつと構えるのヨー。」

「お、おひ！」

棒を持つと円盤が先端の左右に集まつた。

どう見てもピコピコハンマーです。本当にありがとうございました。

にしてもなぜ彼女が?  
チルル

彼女はエディルレイド ぶつちやけ一次元の世界の人物のはずなのだが。

まさか俺は一次元の世界にいるとか!?

そうすればチルルのこともあの化け犬も納得出来るー。  
ねえよ。

まさか一次元と三次元が合体したとか!?

ねえよ。

どっちにしろヴォルクスはどうした。

「ガルルル……」

化け犬は距離を取りながら警戒していた。

若干忘れてた。どうしよう。

とりあえずハンマーの部分を何時でも振れるように背中に向ける。

……数秒、数分たつたか分からなくなつた頃化け犬がどうどう突っ込んで来た。

「うわあ！？」

急な突進に思わずピコハンを降つてしまつた。

ただ降つた攻撃は当然避けられて今度はその鋭利な爪を向けた。

だがその爪も円盤によつて防がれる。

「ナイスサポート！」

チルルに感謝しつつ化け犬を思いつ切り殴つた。

モロに当たつた化け犬は地面に叩きつけられながらも立ち上がるうとする。

「させらかよ！？」

その隙に一枚の円盤全てが狙いを定めて飛んでいた。

化け犬はそれを受け止めることしかできず、円盤が帰つてくるところには力無く倒れていた。

「やつたか……」

やべえこれ死亡フラグじゃね?と思つたがまた襲つてくる様子はなかつた。

これで一安心、かと思いきや化け犬から青い宝石が出てきた。なぜかローマ数字で『??』と書かれている。  
なんぞこれ?

「ああ、なるほどなの?」

ビリやらチルルは知つてゐみたいなので聞いておく。

「あればジュエルシード。無闇にいろんな生き物の願いを叶えるやつかいな物なの?」

「いろんな……つて人間意外もか」

「そうなの?。だからまた発動したらやつから封印するの?」

「封印つてどうやって?」

「イメージなの?」

「イメージ?」

チルルがピコハンから人型になる。

口りな体系に金髪のツインテール。髪留めはピコハンの円盤と同じ形をしている。おまけにハートの飾りが付いた帯。

彼女こそ人間よりはるかに長寿で人間との“同契”により武器化できる存在  
エディルレイド。

前世の記憶によれば漫画の世界の話しなんだが……。

「事実、アタシもアンタのイメージから作られたの?」

ほらやつぱり違……なん……だと?

「アタシの正体は“グラント”。所持者のイメージを形に変える、つまりは持ち主の願い事を叶える道具なのπ。今の姿はアンタの強い盾をイメージした姿なのπ」

「質問がいくつかある」

「なんなのπ？」

俺は混乱した頭で冷静に質問を導き出した。

「一つ目、俺は盾をイメージしていない」

「正確には生きる執着心なのπ。生きたい決意は自分を守る」と、守るものとこえは盾。つまりは間接的に盾をイメージしたわけなのπ」

「二つ目、お前は“チルル”じゃないのか？」

「“チルル”なのπ。ただし、イメージで作り出された“チルル”だからオリジナルの“チルル”じゃないのπ」

「三つ目、お前はジユエルシードってやつと何が違うんだ？」

「全然違うのπ！アレは人間でも動物でも願えば望まなくて叶えてしまうのπ。その点アタシは所持者が強く願わないと発動しないから危険度が全然違うのπ」

「四つ目、俺はそんなもん持っていない」

「持つてるのπ」

「どこに？」

「身体の中」

「は？」

「じゃ」と、

「一昨日、アンタがビー玉と勘違いしたやつなのπ」

あの綺麗なビー玉か。

ん？ 確かアレニ

「次が入る」や「二番」など

「やうやうのπ。しかもやうひ身体の一部として吸収されたやつだから

卷之三

つまり消化（？）されたことかよ！？

「分かつたなら早く封印するの?」  
「はあ……分かつたよ、なんか封印するものイメージすればいいん  
だな?」

あー……まだ頭混乱してる。

取りあえず封印するものとして、たらチ川川繫かりてアレしかないと

目を閉じてイメージする。

なるべく細部まで思い出してみると、ふと右手の甲あたりに違和感が生まれた。

れた符が出てくる。  
二八は付皇符。

本来の使い方はエディルレイドを封印する為だけビイメージム々言つてたのでエディルレイド以外も封印出来るようになつてゐる……は  
ず。

兎にも角にも封煌符でジュエルシードとやらを巻きつける。

勿論手動でグルグルと。

漫画みたいに投げたら巻き付いてるとか出来るわけないだろ。

「これで封印出来たか？」

「力は弱まっているけどまだ不完全なのヨ」

マジかよ。

やっぱ真名使わないとダメか。

「ジュエルシードナンバー？？」

いつたん区切つて深呼吸する。  
そして、叫ぶ。

「デス・リベルタ  
煌縛鎮！！」

符が一瞬光り、地面に落ちる。  
今度こそ封印出来たみたいだ。

「別に叫ぶ必要なかつたのヨ」  
「気分だよ！突っ込まないでくれ」

封印したジュエルシードを回収しに行くとあの化け犬はいなくなつており、変わりに普通の子犬が横たわつていた。

「ジュエルシードはこの犬に取り憑いていたのヨ」

子犬に触つてみると暖かく、息をしていた。  
よかつた、生きてる。

子犬を抱き上げながら一緒にジュークエルシードも回収する。  
……持っていたくないけどほつといたら危ないしな。

「さて、回収したらとつとと行くの兀」

「別にそんな急がなくともいいだり」

「誰か来るの兀」

そういうえばチルルつて感知機能付きだつて。

いや、でも今の戦闘見られたわけじゃないし困らないと思ひなごどへ。

「相手は多分……管理局なの兀」

「管理局？」

「詳しい説明は後なの兀。今言えるのは捕まつたら一度と朝日は捕めなくなるの兀！」

「怖ッ！ なんで！？」

「それだけアタシがレアなの兀。わあ、早くするの兀！」

なんか物騒な組織だな。

「つ、つ、つと逃げるに限るー」

……  
橘 司守

高町 なのは

「ここのはず……だよね？」

「うん、間違いない。微かにだけど魔力が残つてる」

わたしとフロレット……じゃなくてユーノ君はジュエルシードの発動を感じて神社に来たんだけど……

「いないね」

「戦闘の痕跡がある。きっと誰かが戦つたんだと思つ

林側に進むと地面が抉られた様な後がありました。  
どうやつたらこんなこと出来るんだろう?

「やつぱりその人も魔導師なのかな？」

「分からぬ……仮にそうだとしたら魔力の残留が少な過ぎる。この量だとジュエルシードの発動時に出る魔力とほぼ変わらない」

「素手で戦つたとか？」

「アレを素手で倒せると思つかい？」

無理かも……。

レイジングハートの力を借りてもスッゴく大変だったもん。

「倒せたとしても大怪我をしてるはずだ。でもここには血が一滴も落ちてない」

じゃあどうしたんだうつ?

ここに来るまでに会つた人と言えば氣絶してたお姉さんだけだし……。

「取りあえず」の辺りを一回つしよつ。もしかしたら何か分かるかもしれない」

「うん、分かつた」

ユーノ君を肩に乗せて歩き出す。  
本当に誰がやつたんだろう?

## 第七話 チート?いやいやない!ヒマジでいらぬからね!この必要ないか

碧羅（以下碧）「作者と一  
司守（以下司）「主人公の一」

碧&司「チート大図鑑ーー!  
ワーワーワンドンパフパフー

碧「これは作者がマイナーでもないけど有名でもない作品の技・道  
具・ネタを使用するので主人公が使ったチート能力を紹介する」「一  
ナード」

司「いや有名の使えよー?」

碧「ハツ!何を言つている?一次創作だから使いたいネタを使つに  
決まつてゐるだろう!?」

司「駄目だこいつ……早くなんとかしないと……」

碧「早速紹介しますぞー!」

### 【名前】

チルル（ティクル＝セルヴァトロス）

### 【原作】

エレメンタルジエレイド

### 【能力】

武器化 形状ピゴピゴハンマー

一二枚の円盤を操る

### 【その他】

エディルレイドと呼ばれる人間との同契（リアクト 契約みたいな  
もの）により武器化できる種族

基本的に現代兵器じや歯が立たない

チルルは盾属性（ジン＝ディフェンダー）で防御に特化している

口癖は「～の印」

原作では使い手であるヴォルクスにベタベタ  
感知の能力があるが本来はエディルレイド限定

【名前】

封煌符

【原作】

エレメンタルジエレイド

【能力】

エディルレイドの封印

【その他】

主にエディルレイドハンターであるヴォルクスが使用  
そのまま使用出来るが特別な訓練を受けたエディルレイドには効か  
ない

ただし真名を使えばこの限りではない  
使用者の実力次第ではエディルレイドの能力を封印したり半永久的に  
眠りにつかせることが出来る

司「なぜこれを最初に出した」

碧「チルルは防御中心だから素人のお前でも使えと思つて。封煌符  
は他に封印出来るものが思い付かなかつたから」

司「あるだろ！？パンドラハーツのレイヴンとか」

碧「でもアレつて詳しい能力わかつてないじゃん」

司「まあそうだけど……」

碧「後チルルの感知能力だけどエディルレイドなんていないから魔  
力に反応するようにしました」

司「それじゃここからで」

碧「またいつか」

## 第八話 姉萌えは一次元に限る

「なあ」

「なんなの<sup>ヨ</sup>?」

「お前何時までいんの?」

子犬を氣絶してる女性の側に置いて神社を脱出した後隣のチルルに当然の質問を投げかけた。

「別にアンタが望めば消えるの<sup>ヨ</sup>。アタシはアンタのイメージによつて作られたんだから」

うーむ……よくわからん。

「でも消えるのを望むつてのはな……」

「別に存在を消すわけじゃないの<sup>ヨ</sup>。また出でてくることも可能なの

ヨ」

「わつこうなう……まあ試しこ

消えろと念じてみる。

そうするとチルルは徐々に透明になつて、消えた。

出て来いと念じてみる。

今度はさつきと寸分変わらない体勢でチルルが現れた。

「なんか……すげえな

「やつとアタシの凄さが分かつたの<sup>ヨ</sup>?」

チルルが無い胸を張りながらドヤ顔してきた。  
なんかウザかつたので話題を変えることにした。

「そりいや管理局って何なんだ？」

さつき説明された限りじゃ物騒な組織みたいだけど。

「本当は時空管理局つて言うのヨ。面倒くさいから管理局つて言うけど、次元世界全体を管轄する為にできた組織なのヨ」

「次元世界？」

なんかいきなり大規模な話になつたな。

「この世には複数の世界があつてそれらを管轄、調査する組織、それが管理局なのヨ」

「名前がそのまんまのとすげえデかい組織つてのは分かつたけどそれがなんであそこに来たんだよ」

「アタシ……グラントやジユエルシードつてのは危険な代物だからなのヨ」

まあ確かに子犬をあんな物騒な姿に変えたり願いを何でも叶えることが出来るなら時と場合によつちや危険だよな。

「時には世界を滅ぼすほどの力を持つた道具。そんな物をほついたら危ないから管理局で保管する為に回収してるのヨ」

「……オイ、今とてつもなく危険な言葉が聞こえたぞ」

「心配しなくてもいいのヨ。ジユエルシードは単体じゃそこまでの力は無いし、ちゃんと封印してれば大丈夫なのヨ。アタシに関してはアンタが望まなければいいだけなのヨ」

本当に大丈夫かな……。

なんかかなり不安になつてきたぞ……。

「今からでも自首して身体調べてもうつか……」

「ダメなのヨーーー！」

「痛い痛い痛い！痛いから噛むなー！」

いきなり頭に噛みついてきやがつた！  
チルルつてこんなキャラだつたか！？

「出てつたから何日も身体いじくりまわされた挙げ句に最悪殺されるかも知れないのヨーーー？」

「流石にそれは……」

「無いとは言い切れないのヨーーー！」

そこで俺はチルルの様子に気づいた。

もしかして……泣いてる？

「せつかく……まともな人間に使われると思ったのに……」

「そうだよな。普通こんな道具手に入れたら自分の私利私欲の為にしか使わないよな。

道具とはいえ意志があるんだ。  
当然辛いことや悲しいことがあつたよな。

そればつかりの思い出なんて嫌だよな。

「……分かったよ……管理局には自首しない。だから泣くな

「な、泣いてなんかないのヨーーー！」

「はいはい」

「なんなのヨーーー！」

チルルをからかいながら我が家へ帰っていると制服を着た見覚えのある後ろ姿が見えた。

あの背中は……

「悪いチルル、ちょっと消えてもらつていいか?」

なんか言い方がアレだな……。

「? 分かったのヨ」

了承を得てから消えるように念じる。

完全に消えたのを確認してからその背中を追つた。

「力サ姉!」

走りながら名前を呼ぶと彼女振り向いた。

腰まである黒のストレートに整つた顔立ちは綺麗といつよりも可愛いと言つた方が適してる。

そしてなによりそのスタイル。

出でているところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。

まさしくポン、キュッ、ポン。

女性達から羨ましがられるスタイルと美貌を持つた彼女の名前は橋  
暉音。

そんな通称力サ姉の性格だが

「司守!今帰り?一緒に帰る?」

ぎゅーーーー。

「力サ姉苦しいって……急に抱きつかないでよ」

……重度のブラコンである。しかも俺限定の。別に抱きつかれるのは嫌いじゃないよ?むしろ嬉しいよ?なんてつたつてこのおっぱいを独り占めできるんだから。フヘヘヘ……。

おつと危ない危ない。

危うくキャラ崩壊するところだつたぜ……。

恐るべしおっぱい。

「じめんね。手、繋い?」

力サ姉が手を伸ばす。

俺も手を伸ばして繋ぐ。

力サ姉は、俺の命の恩人だ。

俺が再び目を覚ました時に初めて見たものは雨だった。

ダンボールらしき箱の中に毛布にくるまれていた。

自分が赤ん坊だったからか、毛布が水を吸っていたからか分からないが体が動かなかつた。

いきなり生死のピンチに絶望していると小学生ぐらいの傘をさした女の子

当時9歳の力サ姉が自分を覗き込んでいた。

力サ姉は悲しそうな、懐かしそうな顔をした後、俺を抱き上げて橋院に連れてこられた。

それから橋院で育てられることになった。

それからは何故かサ力姉が付きつきりでお世話をしてくれた。

今でこそただのブラコンで済んでいるが恐らく俺がまったく動かなくともずっとお世話をしてくれるだろう。

「はやでちゃんの家に行つてたの？」

「前回行けなかつたからね。お土産持つて行つたんだ」

「偉いね、司守は」

そう言つて空いてる手で頭を撫でられる。

余談だがはやでの家に行く日はだいたい決まつていて。

基本2日に一回勉強を教えに行つていて。

それとは別に出かけたりする予定を作つたりもしているが。

もちろん学校の友達を疎かにはしてないぞ。

もつともはやでほど仲のいい友達はいないけど。  
いふとしたらアリサぐらいか。

「そういえばバカ兄は？」

カサ姉とバカ兄は同じ学校に通つていて。

流石に毎日ではないがカサ姉はバカ兄と帰ることがある。  
カサ姉は人見知りであまり他人と話をしたがらない。

つまり友達がないのだ。

ということは必然的に学校で話すのはバカ兄だけになり、一緒に帰  
るのもバカ兄になる。

「なんか用事があるつてどこかに行つたよ。晩御飯はいらないって  
言つてた」

「ふうん……」

珍しいな、バカ兄がそんな遅くまで出でるなんて。

バイト（「ンハエー」）は土日だけだし夜勤なんて滅多にないし。

ま、気にする程でもないか。

：

：

橋 司守

橋 博士

：

：

「おーーーお帰り司守、暈音ヴァツハ！！」

予定よりかなり早く帰った後から帰ってきた一人を迎えた瞬間司守のドロップキックをくらった。しかも鳩尾に。超痛え。

「晩飯いらねえんじゃないのかよバカ兄

「ゴッホ、ゴッホ」ホホホホ……早めに終わったんだよ……あー……痛え……

「うえ……飯食つてないのに吐き戻してきた。

「おー司守お前……つていねえー？」

「着替え来るつて部屋に行つたよ」

つたぐ、司守はもつと俺を敬うべきだ。  
量音には優しくしてゐくせに。

確かに俺はバカだけど取り柄の一つか一つ持つてゐんだぞ！

「ねえ博士」

割とポジティブな考えをしてると量音が話し掛けってきた。

「見つかったの？」

……

「ああ、見つかった。残念なことにな」

「そう……」

「しかも幾つかあるぞ。最低でも100はあるはずだ」

「……」

量音は黙る。

当然だろ？ 爆弾に等しいものがこの町の至る所にあるのだ。  
家族がそれの被害にあつたり……。

「全部見つけられそう？」

「誰かも“こいつ”を探してる。そいつを見つけないと難しいな

ポケットに入れといった“物”を取り出す。

「つたぐ、ちやんと仕事しろよ……」

?と書かれた青い宝石を眺め、ボソリと呟いた。

## 第九話 主人公とヒロインのデートって大抵邪魔者入るよね（前書き）

大変長らくお待たせしました

今後の展開について考えてたら遅くなりました

司「前回の更新から約一週間ぐらいか」

ああ、思ったよりたつてなかつたんだ  
では物語をどうぞ

司「反省しろよ…」

## 第九話 主人公とヒロインのデートって大抵邪魔者入るよね

あれから数日。

とくに何もなくジュークエルシードや魔法なんかとは絡まずに過ごせた。一応チルル 正確にはグラントだが に管理局や魔法について教えてもらつた。

どうやら俺にもリンクカー コアと呼ばれる魔力を作り出す機関があるらしい。

簡単な魔法や漫画の技とかを未完成ながら覚えたが多分使わないだろつ。

つか使う状況になりたくない。

そもそも三日で飽きた。疲れるし。（チルルはため息を吐いてたが）

「あ、これ可愛いわと思わへん？」

「やうか？俺はこいつのほつが可愛いと思つが」

つーわけで今ははやてと街中でデートをしている。

ウインドウショッピングしてるだけだからデートと言つよりも散歩に近いが。

まあガキ同士だしこんなもんだろ。

なのは達にもサッカーをやらないかと誘われたがデートの約束があつたので丁重にお断りした。

なんでもなのはのお父さんが地元のサッカーチームの監督をしてるとかなんとか。

サッカーなんて興味ないけど。

はやてが乗っている車椅子を押して歩く。

最初の頃は俺が押して歩く度に「ありがと」「やう」「めんな」と

か言つてきたが最近は全然言わない。  
その代わりよく話すようになった。  
今だつて

「昨日のペット大特集見た？」

「あのペットのホームビデオかき集めたやつだろ？見た見た。可愛  
いかったなあれば」

「じゃあだるまさんが転んだをする猫は？あれわたし好きや～」

と、いう会話をしている。

確かに謝れらるようこいつちの方がいい。

そして夕方。

楽しい時間はすぐに終わってしまう。  
正確には時間は進む速さは変わらず、自分の勘違いだが、とか偉そ  
うに言つてみたり。

これで後ははやてを送つていいくだけ……

「…………ッ！」

「？ どないした？」

今一瞬すじく嫌な感覚に陥つた。  
なにかが起こる予感がする……。

(来るのヨー)

チルルの声が脳内に響いた瞬間、巨大な樹の根のよつた物が「ンク  
リートを割つて出てきた。

「 わやああああ ！ ！」

はやての悲鳴と共に俺は即座に車椅子を方向転換し、その場から離れた。

ドン！と何かを叩きつけるような音が後ろから聞こえた。

振り返ると巨木の根が俺達が居たところを叩きつけられていた。

「 ……シーウけんなよー ！」

そのまま突っ走って逃げようとする。

が、新たな木の根が俺達の前に現れた。

「 クソ…… ！」

仕方なく車椅子からはやてを抱き上げる。

「 え…… ちよっと巨木くんー… ？」

完璧お姫様抱っこ状態だが気にしない。  
てかする余裕がない。

これって確實にジュエルシードだよな……。  
なんでこんな街中で発動すんだよー！

正面ギレをしつつ走り出す。

しかし長くは続かないだろ！。

いくらはやてが軽くても子供の体力なんてたかがしれてる。  
まだまだ未発達の身体じゃ 同い年の子供を抱いて長く走れるわけがない。

まあ走れるだけす”いが。

とりあえず安全な所にはやてを送らないとな。  
ジュエルシード探索はそれからだ。

しばらく走り続けた後、近くのビルに入った。  
避難した後なのが中には人がいなかつた。  
本当ははやても避難させたかつたが流石に体力が保たない。  
はやてをソファーに座らせる。

「大丈夫か、はやて」

「わたしは大丈夫。司守くんの方が大変やつたろ?」

「平氣平氣。割と鍛えてるから」

学校の授業で。

え?鍛えてない?

細かいことは気にすんな。

「……さて」

ジュエルシードをなんとかしないとな。  
ここも何時まで安全か分からんし。

「ちょっと周り見てくるわ。大人もいるかもしれんし」

「え……大丈夫なん?外は危ない?」

「無問題」

なぜか中国語で言つてビルの出口に向かおうとする。

ピシッと嫌な音がした。

音の発生源らしき方向……真上を見る。

よく見えないがひびの様なものがあるよつな……。

心なしか埃が落ちてくる気も……。

嫌な予想が出来上がった途端、まるで正解と言つかのよつて天井が音を立てて崩れ落ちた。

“つきながらだくめき”

チルルが身体の中で謳ひつ。

ダメだ間に合わない！

もつとモーションが短くて強力な盾は

あつた！

空中に“円”の文字を書く。

「竜之炎伍式！円！…！」

瓦礫が地面に落ちた。

本当ならその瓦礫が俺達を潰して死んでいた。

が、間一髪なんとか間に合つた。

「あ……あれ？」

自分の身を守るように身を丸めていたはやては無事だつたことに気づいてようやく身体を起こした。

そして不思議に思った。

なぜ無事なのか、この赤い半透明な壁はなんなのか。

「」の赤い半透明の結界の名は円。

“点”によって生み出された“面”の結界。複数の炎の玉で面を繋げた強固な結界だ。

最も、弱点は点を壊されたら面も少なくなることだが。

つまり、点が四つなら四角形の結界が、三つなら三角形の結界が、二つなら当然出来ないということだ。

もちろんそんな弱点があつても強力なことに変わりはないが

円を解除して自分だけ出る。

その後再び円を発動せんやでを囲む。

「え……ちよ、なんやこれ!」

「悪いにはやで。とりあえず「」の中にいれば安全だから

「これ司守くんの仕業なん!?はよ出して!」

「外は危険だからここにいる。すぐ戻つてくる」

「まさか一人で行く気!?確かにわたしは歩けないけど……「」で助けを待てばいいんちやつか?」

「そうしたいんだけどね……」

「」のままほつとけば被害は増える一方だりつ。

早くジユエルシードを封印しなければ……。

「いろいろ事情があんだよ」

「…………」

俺の目をはやてがジッと見る。  
やだ照れちゃう……なんて思わずはやての視線を受け止める。

「わかった、行つてええで」

「ありがとう、はやて」

「ただし…早く戻つてくる」とその事情をちゃんと話す約束してからや

「ああ、早く戻つてくるし、後で事情も話すよ」

出口に向かつて歩き出す。

「行つてくる」

「……こつこつしゃー」

ビルを出た。

わあ、ひとつと用を済ませて戻るか！

チルルに習つた飛行魔法で空を飛ぶ。

途中でバランスが崩れた。

「おつと……また練習しないとダメだな」

まだ完璧に修得する前に止めたからな。  
他のもだけど。

冷静に考えるとよく円発動出来たよな。  
失敗した場合を想像するゾゾツとする。

“つきながらだくめや

艶なる息そに

契り籠ん！ ”

チルルと同契する。

同時に黒いロングコートを生み出し袖を通した。

この黒衣は以前チルルに教えてもらつたバリアジャケットを作つてみたものだ。

防刃、防弾、対魔の効果をもつていてる。

黒衣なのは俺の趣味な。

カツコイイじゃん、黒衣。

黒猫しきり煌珠狩人しきり呪われた炎術士しきり。

そんなことよりジューエルシードだ。

早く探し出さないと危険すぎる。

多分幾つかある巨大な樹のどれかにあると思うが……どれだ。  
なんかチートで出して探した方がいいよな。

「止まるのπー！」

チルルに言われたとおりややバランスを崩しながら空中で止まる。

「どうした」

「誰かいるのπ。神社のときと同じ奴なのπ」

「マズいな…… 一旦どこかに身を隠すか」

「前方やや左のビル…… 砲撃魔法を撃とうとしてるのπー！」

砲撃つて確かデカいビームとか撃つんだよな？

「なんでそんなもんを？」

「多分力ずくで封印するつもりなのπ」

「ずいぶんパワフルな…… つてあの距離でかー？」

チルルが言つたビルと巨大樹は正確な距離こそわからないが、 そうとう距離がある。

そこからジューエルシードを撃ち抜くつて…… 自信があるんだうづな。

「顔だけでも見とくか……」

ジュエルシードはその魔導士に任せ、俺はそいつの顔を押もうとスコープを生み出して覗く。

魔導士のバリアジャケットは白く、ドレスの様な姿だった。手にしているデバイスは槍の様に先端は尖り、桜色の魔力を集中させていた。

そしてその顔は……

「なのは……？」

学校の友達である高町なのはだった。

なぜなのはがここにいるのか？

なぜバリアジャケットを着ているのか？

なぜ魔導士の武器であるデバイスを持っているのか？

複数の謎が脳内で浮かび上ると同時になのはのデバイスから魔法が解き放たれた。

桜色の光線が巨大樹に直撃する。

すると巨大樹はそこから見る見るうちに消えていった。

「撤退するの！」

チルルが言つ。

「あの子があんたの友達だとしても管理局かもしれない。捕まる訳にはいかないの！」

「……分かった」

なのはが魔導士であること。

はやてにいろいろ説明しなきゃいけないこと。  
両方に頭を抱えながら俺ははやての所に戻った

## 第九話 主人公とヒロインのデートって大抵邪魔者入るよね（後書き）

チート大図鑑2

【名前】

円

【原作】

烈火の炎

【能力】

点による面の結界

【その他】

主人公、烈火に宿る八竜の一匹

三つの目を持つ火竜

炎の結界王を自称してるだけあって強力な結界を張れる  
ただし結界の所々にある火玉の点を破壊されると結界の面積が小さ  
くなり最終的には結界自体が破壊される

司「なんか防御系多くね？」

碧「お前の命を守る為だ。素人が銃を持つたつてビビつて撃てない  
し、撃てたとしても反動で銃落として殺されるだけだろう？」

司「グ……確かに」

碧「だつたら盾持たせた方が安全だろ。それともなんだ、また死に  
たいのか？」

司「そ、それはそとなんで今回遅れたんだよ

碧「話題を変えやがった……。実ははやてにお前のことバラそうか迷  
つて」

司「そういや今回バレたな。つかバラそうって字だけ見ると物騒だ  
な……」

碧「秘密にするかしないかでA・Sが変わるからな」

司「A・Sってなんだ？」

碧「なんでもないよ。お前ただ主人公してろ」

司「なんか無性に腹が立つんだが」

碧「今回はここまで」

司「次回はどうすんだ？」

碧「フフフ……次回は皆さんお待ちかねスク水つ娘の登場だ！」

司「スク水！？」

碧「更新は未定だがな」

司「オイ！」

## 第十話 修行開始 忍び寄る熊と獣耳とスク水魔法少女

あの事件の後、俺ははやてに様々なことを教えた。

魔法のこと。それを使う魔導士のこと。管理局のこと。  
全てチルルの受け売りだけだ。

もちろんジュエルシードの事は言わなかつた。

ただ俺の事は「管理局に所属していない魔導士」と説明した。  
間違つてないからな。

「なんで入らへんの?」

とこつ間に俺は

「はやてに会えなくなるからな」

と答えた。

正直めっちゃ恥ずかしいセリフだよな。  
はやても顔真っ赤にしてたし。

でも管理局に入る気は本当に無い。

そういうデカい組織つてのは一枚岩じゃないから誰が何をやらかす  
かわかつたもんじゃない。

ドラマでも見るように警察の上層部が犯罪を犯してたりするからな。  
基本的に信用できません。

だいたいどこにあるのかも知らんし。

とつあえずそれはそれでおいといて。

「オブティックバレル！」

手にした白い銃のトリガーを引くと銃口から約10メートル先の空間で爆発が起きた。

そこには何もないし、そもそも銃口からは何も出でていない。

白い一丁拳銃 魔銃ベルヴェルクは術式と呼ばれる魔法と科学を混ぜ合わせたものを遠隔発動させることが出来る。

今のがまさにそれだ。

普通の銃は弾が出て直線に飛んでいく。

しかしベルヴェルクは術式を遠隔で撃つので任意の場所に任意の威力で撃つことができる。

最初は術式 자체を使うのが大変だったが慣れればなかなか使い勝手のいい武器だ。

ん？ 何してるかって？

修行だよ修行。

因みに一日につかないよう日に山で修行している。

基本毎朝、はやてに勉強教えない日は平日は暗くなるまで、休日はほぼ一日中している。

前回のジュエルシーードの事件のときに思つたんだがもしかしたら俺の家族にも被害が及ぶかもしない。

そのとき俺が強ければはやてのときみたいに助けられるかもしれない。

なら強くなるしかない。

だから修行を始めた。

前は漫画の技を使えるかもしれないなんて理由で、しかも二日で飽きたが今回は違う。

絶対強くなつて守つてやる！

「だいぶ良くなつてきたのヨ。 学校もあるし今朝はここまでなのヨ」

師匠であるチルルからそう言わされたのでベルヴェルクとチルルを消してジャージから制服に着替える。

そして鞄を持つたとじろで、固まつた。

そう、今の鳴き声で分かるとおり熊が木々の奥から現れたのだ。

「まけえことはいいんだよ！」

そんなことより大事なのはこの熊だ。

テナ。

۷۰

今や鹿のせいで絶滅したとそれでいた熊

## アナログマ！！

「い、生きていたのか……！」

キュー♪ーン！

— ケヤ — — ! 「

「のわ!?」

目を光らせたかと思つたらいきなり殴りかかってきた！あれか、絶滅したと思われてたのが気に入らなかつたか。しかたないだろ、今は地デジの時代なんだから！

とにかくさつきまで出してたベルヴェルクを出して殴った。  
もちろん殴った後術式を撃つて蜂の巣にした。

ひとつは「えエグい」としたな……。

せんせー消え……消えでる!?

アナログマのほとんどが消えたころに身体からジユエルシードが出てきた。

# 「アリオグマ」の「アリオグマ」

「 そこの貴方、そのジユエルシードを渡してください」

「詰う」と聞いといたほうが、無駄なケガしないで済むよ」

アナログマの追悼をしてこるとなにせ、物騒な台詞が聞けえたので  
ゆっくり振り向く。

7

そして言葉を失つた。  
なぜなら……なぜなら……

なぜなら……なぜなら……

そして言葉を失つた

金髪ツインテスク水幼女とナイスなボディの獸耳お姉さんが空から  
降ってきたからだッッ！！

「あらがとうござりますーー。」

礼を言つたが、良いもん見れたからなー。  
もちろん腰を90度曲げて。

スク水幼女は腰にヒラヒラが付いててパンチラっぽく見えるし獸耳  
お姉さんはへソ見えてるし一人ともマントでマニアックだしーー！

「…………え？」

「なに言つてんだい？」

突然お礼を言われてポカーンとしている一人。

そりや何もしてないのでいきなりお礼言われたら驚くよな。いつも  
としては十分してもらつたが。

「ねえフロイト、やつぱりこいつ管理局じゃないよね」

「うん、さつきの戦いで戦い慣れしてる様には見えなかつた。それ  
にジユエルシードって言葉に反応しなかつたから多分違うと思つ」

ん？ 管理局を知つてゐることはないこの娘達も魔導士なのか。よくよく考えれば空中に浮いてゐて時点で確定してゐるか。つか見てたのかよ。

それはそうと、

「えつと、ジユエルシード欲しいの？」

「ツーあんたやつぱり……」

獸耳お姉さんが睨んで襲いかかろうとするのをスク水幼女が止める。正直めつちや怖いです……。

「待つてアルフ。……貴方は管理局じゃないの？」

ちゅつと高圧的になつたな。

獸耳お姉さんほどではないけど怖いぞ。

「いや、違ひけど」

「じゃあ……なぜジユエルシードを知つてゐるの？」

「なぜつて……教えてもらつたから」

「誰から？」

「それは教えられない」

「さつき言つたことは撤回するよ。ここに座つて、フロイド

「…………」

なんや。

確かに教えないってのは座つてけど。

だからと言つてグラントのことを教えるわけにはいかないし。困つたものです。

「ジユエルシードは最近発見されたロストロギア……つまりまだ

まり知られていない代物。それを知つてるのは怪しい。けど、母さんの為にもジュエルシードを「そおーー」シー?」

アナログマから手に入れたジュエルシードをフェイトと呼ばれたスク水幼女に投げる。

「その巻いてある布を破くと封印解けるから氣をつけりよ  
「え?」

「もう一個!」

カバンに入れといた化け犬から手に入れたジュエルシードも渡す。これでジュエルシードは全て渡した。

「なんで……」

「欲しかつたんだろ?」

「それはそうだけど……」

「なんか企んでんじゃないだろ? うね! ?」

普通はそう思うよな。

けど違う。全然違う。

「フェイトだつたつけ」

「……?」

「母さんの為つてさつき言つたら。俺もさ、母さんが大好きだ。母さんだけじゃなくて兄弟たちも。だからフェイトが自分の母さんが大好きな気持ちわかるからさ、出来るだけ協力しようと思つ。とりあえずジュエルシードを手に入れたらいそつちに渡せばいいよな?」

「本当に企んでんだいあんたは……!」

「アルフ、行こう」

「け、けどフェイト……」

「協力者は居た方がいい」

「……わかったよ。つたく、そういうところは頑固なんだから」

「『めん』

微笑んで徐々に浮上していく。

そして気づいたようにこっちを見て

「私はフェイト・テスター・ロッサ。この子は使い魔のアルフ」

「言つとくけど、私達の命令はちゃんと聞くんだよー。」

「俺は橘司守だ。よろしくな、フェイト、アルフ」

自己紹介を済ませると、フェイトとアルフは遙か彼方へと飛んでいった。

さて、ガハンに入れといった時計を確認する。

うん、遅刻だ。

橘 司守

フェイト・テスター・ロッサ

「ねえフェイト、本当にいいのかい？」

後ろで飛んでいたアルフが聞いてくる。

「大丈夫だよ。アルフは心配し過ぎ」

「そりや心配もするさ。相手は得体の知れない子供だよ？」

「アルフだってまだ子供のくせに」

そう、アルフは人間状態でこそ身体は大きいが実はまだ二歳なのだ。

「あ、あたしは狼だから早く成長するんだよー。フェイトも知ってるだろ」

アルフが止まって頬を膨らませる。

そんな仕草も愛おしく思う。

主人と使い魔だからだろ？

「ねえアルフ」

「なんだい？」

自分も空中で止まりアルフを見つめる。

「私は、母さんが好き」

「……ああ、知ってるよ」

僅かに眉にシワを作るアルフ。

アルフは母さんが嫌いだ。

当然だ。アルフは厳しい母さんしか知らない。

けど昔の、優しかった頃の母さんに戻ればアルフもきっと母さんが好きになるはず。

「あの子も母さんが、家族が好きだつて言った」

「ああ、言つてたね」

「私もあの子も……シズも、家族が好き。ジュエルシードを渡されたとき、確かにその気持ちが伝わつた。だから彼は裏切らない」

「けど……」

「大丈夫だよ」

まだ不安がるアルフに確信をもつて言つ。

「こぎとなつたらアルフが……“家族”が助けてくれるから」

アルフは驚いた後、とびつきりの笑顔で

「当然だろ！どんな敵が来たつてあたしが“家族”を守るんだから！……」

「うん、頼りにしてる」

私達は並んで基地に帰つた。

## 第十話 修行開始 忍び寄る熊と獣耳とスク水魔法少女（後書き）

チート大図鑑3

【名前】

魔銃 ベルヴェルク

【原作】

BLAZBLUE

【能力】

術式の遠隔発動

【その他】

アークエネミーと呼ばれる意思ある魔導書

魔導書といつても形状は本とは限らず様々な形状をしている  
ベルヴェルクの形状は二丁拳銃だが銃であれば変形が可能  
術式を使えれば殴つてよし、撃つてよしの万能武器である

司「やつと攻撃的な武器がでたな」

碧「ヴァーミリオン頭でもするか？」

司「するか！」

碧「無い人は普通にしてるじゃないか」

司「てか分かんない向けのコーナーじゃないのか？ヴァーミリオン頭  
とか分からんだろ……」

司「で、なんで遅れた？」

碧「なんの話しかな？」

司「なんの話しかな？じゃねえ！月の始めに投稿したのに次が月末に投稿つてどういうことだ！」

碧「いや～、実はアナログマのネタやりたくてアナログ終了まで待つてたつていう」

司「……で、次は？」

碧「そうイライラしない。えーと、次は温泉かな」

司「橋院でか？」

碧「違うんだなあ。分かる人は分かるよね。後、作者は和服萌えだ」

司「はいはいワロスワロス」

碧「（・・・）」

## 第十一話 海鳴温泉殺人未遂事件（前書き）

某日深夜

家族と温泉旅行に来ていた少女が共に旅行に来ていた同じ学校の友人に不思議な杖で暴行される事件が発生

加害者の少女は

「早くトイレに行きたかったのに行かせてくれなかつたの」

と供述しており、事件当日について被害者の少年は

「あ……ありのまま起こつた事を話すぜ！」

『俺はトイレの前でN（加害者）と話してたら魔法の杖的な棒で殴つてきた』

な……何を言つているのかわからねーと思つが俺も何をされたのかわからなかつた…

頭がどうにかなりそうだつた…ヤンデレだと気が狂つただとかそんなチャチなもんじやあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ…』

とのことです

より詳しい情報が届き次第お伝えします

え？

……はい……はい……

どうやら事件当時の映像が届いたようですが  
『覗くください

## 第十一話 海鳴温泉殺人未遂事件

あれから数日。

え？ 訓練の描写？

俺は見えないところで努力する派なんだよ。

「それでさあ……」

「え？ それ本当？」

俺はなのは達に誘われ海鳴温泉に向かっている。

温泉とか久しぶりだわ。

しかもお泊まり。

いいね。

ちなみに一台の車で来ており、一台はなのは兄、すずか姉、月村家のメイド一人。

すずかが金持ちということを初めて知った。

あとなのは兄とすずか姉は親公認の仲らしいじゃないか。

爆発しる。

もう一台には俺と兄以外の高町家とすずかと金髪ツンデレ。

「誰が金髪ツンデレよ！」

口に出してないのに後ろの金髪ツンデレもとアリサに怒られた。なぜに。

「思いつきつ口に出してたから」

マジか。

教えてくれてありがとうなのは姉。  
名前は忘れた。

……口に出してないよな？

「美由希ね」

s o r r y.

「特訓と聞こえたが、何かスポーツでもしてるのかい？」

と運転手である土郎さんから声が。

某自己犠牲主人公と名前同じだから名前を覚えられた。  
そうでもないと覚えられん。名前覚えるの苦手だし。  
てか最初から聞こえてるつていう。

考え事してるときは口に出してないか確かめてからにしよう。

「いえ、ただ身体が鈍ってるから自主トレしてるだけです」  
「ほつ……なら家の道場で剣を学ばないか」

その発想は無かつた。

そして家に道場とか金持ち乙。  
どんだけ翠屋繁盛してんだよ。

「いいの？」

「本人がいいと言えばだが……小太刀二刀流と言つんだが知つ  
てるかい？」

「小太刀二刀流は御庭番式しか知りません」

知らない流派だな、と呟く土郎さん。  
だろうねー。

漫画の流派だし。

「まあ気が向いたら家に来ればいい。場所は分かるかい?」

「生讐とお宅に行つた覚えがありません」

「ならなのは、今度連れて来てくれないか」

「はーい！」

何故だ。

い。  
なのははともかく士郎さんにフラグを立てた覚えはない。  
幼なじみを攻略してたらその弟が押し掛けってきた時ぐらい覚えが無い。

「なのはの父ちゃん超怖い」「そう? 優しいお父さんだよ?」

だつてさあ……。

なのはお兄さん……恭也さんだつけ?と湯に浸かつてゐる土郎さんも入つてきていきなり御神流の歴史を語つてきたんだぜ?

恭也さんが止めてくれなかつたら今頃茹で上がつてた。

「大袈裟ね。そのままサウナに行けばいい感じに蒸せたんじゃない？」

アリサてめえ。

「んー……でもなんでお父さんそんなに『お手本を誘うんだ』って。

今までお兄ちゃんとお姉ちゃんにしか教えなかつたの?」

「なんか才能があるんだと。めっちゃ複雑だけば」

鍛えられるのは嬉しいが土郎さんルートとかマジ勘弁。

「とこりうどん」

「ん?」

「こじりハペシト〇クなの?」

いつの間にかなのはの肩に乗つていたフュレット。今までなぜ気づかなかつた俺。

「飼い主がちゃんと面倒見れるなら構わないって」

「へえー……名前は?」

「コーンくんつていづの」

「キュキュ!」

「お前今日からマニアんな

「キュー!?

「なんで!?

「なんか声が似てた」

「なんであんたの知り合にフェレットに声似てるのよ

いや、知り合にじやないけど。

「なのはは梨花ちゃんで」

「わたしも!?

「アリサはルイズだな」

「誰よいつたい!?

「すずかは ああ、すずかいたつけ。すずかは大先生な」

「わたしは喜んでいいのか悲しんでいいのかわからない……」

「喜べ、頭良すぎて落ちこぼれた魔装少女が尊敬してる人のあだ名

だ」

「なんか……アンタを疑つてたアタシが馬鹿みたいだよ……」

なんか聞き覚えのある声だなー、と思つたら田の前に浴衣姿のアルフがいた。

耳と尻尾が無い……だと……？

「君かね、うちの子をあれしてくれちゃつてるのは

「え？ え？」

「あんま賢そうにも強そうでもないし……ただのガキンチョに見えるけどね」

何故かなのはがボロクソ言われてる。

なのははアルフに何をした。

そしてなのはを守る様にアルフとなのはの間に入つて睨むアリサ。カツコいい。

「なのは、知り合い？」

「う、ううと」

「嘘だ、絶対嘘だ。初対面でボロクソ言う人なんていたわ、目の前に」

「アタシかい？」

他に誰がいる。

「出会つていきなり脅された上に疑われるとか涙目過ぎる」

「はいはい、悪かつたって」

誠意が感じられねえ。

「シズくんの知り合い?」

「そんな感じ」

「なんであんたの知り合いがなのはにいぢやもんつけてくるのよ」

俺が聞きたい。

「アツハツハツハツハ」

「いい病院紹介するぞ」

「失礼だね!」

だつていきなり笑い出すから。

「どうやら人違いだつたみたいだねえ。『ごめん』『ごめん』

そう言つて去つていくアルフ。

なのはが険しい顔してるのはきっと氣のせい。

(聞こえるかい?)

(脳内に声が!?)これが噂に聞く念話か。しかし相手に伝える方法を知らない俺は返事が出来ない。スマンアルフ)

(聞こえてるから。夜にフェイトがジュエルシードを封印するからそこ茶髪の子を足止めしといて)

(なのはをか。何故に)

(何故つて、その子も魔導士だからに決まつてるだろ?それじゃ頼んだよ)

アルフは一度だけこつちを振り向いてどつか行つた。

……やつぱりのはつて魔導士だつたのか。

今まで気にしてなかつたけど事実だつて分かると気になるよな。  
足止めついでにそれとなく聞いてみるか。

「鬼は言いました。

『俺の仲間になれば世界の半分をくれてやるつ』

すかさず桃太郎は

『ならお前を倒して世界の全てを貰おつ』  
と鬼を真つ一つに斬りました。そして桃太郎は世界を征服しました。  
めでたしめでたし』

それはめでたしでいいのか？

子供達が寝るときすずかのメイドさんが桃太郎を読んでくれたんだ  
が、俺の知ってる桃太郎はそんな話じやなかつた気がする。  
しかもお供が猿、犬、雉じやなくてゴリラ、狼、鷲とか勝てるわけ  
がない。

つかゴリラ日本にいねえ。

「みんな寝たかな」

すいません起きてます。

なんて言えるわけなく寝たふり。

みんなも……どうして寝られるんだよ。

突っ込みどころ多すぎて寝られねえよ。

そもそもこんな早くに眠れるか。

まだ10時だぞ。

フェイトまだかなあー……。

約三時間ぐらいたつた頃だろうか。

大人達の声はなくなり、いい感じに眠くなつたときだつた。

ジユエルシードが発動したであらう、あの嫌な感覚が眠氣を吹き飛ばした。

同時になのはも飛び起き、部屋を出て行くとする。  
何故ユーノを連れていく。

「……どこ行くんだ、なのは?」

ただいまちゅうど今起きましたよ?と言わんばかりの演技を披露中。  
たぶん子供店長に勝てる。

「え、えつと……トイレ……」

「なら俺も行こ!」

「ふえ!/?べ、別に一人でも平氣だよ?」

「ユーノを連れて行こうとしてる人が何を言う。後、俺もトイレ行きたいだけだ」

渋るなのはだつたが時間の無駄かと思つたのか了承してくれた。  
やつたね。

早く封印終わらないかな。

橘 司守

高町 なのは

暗い廊下を歩くわたしとシズくん。  
「うーん、なつかしそうだね。……早くジコヒルシードを封印  
しなきゃいけないの！」……。

(仕方ないよ、なのは、彼を送つたらすぐジユーハルシードの所に行いつ)

少し歩いてやっとトイレに着いたの！

けどなかなかシズくんがトイレに入ってくれないの……。

「なあ、なのは」

今度は何なのー！

「なんかさ、最近悩み事とかないか？」

「悩み事……？」

「なんかそう見えたからさ」

そう見えるのかなわたし？

たしかに悩んでる」とはいってぱいあるけど……。

「ううん、何もないよ」

さすがに学校の友達に魔法の事は言えないもん。

「そりゃ……」

シズくんは納得出来なかつたのか、まだ「うちを見てる。うう……早くしなきゃいけないの」「……。

(「のままじや埒があかない。なのは、彼を氣絶させよつ  
(氣絶つて……危なくない?)

(ちゃんと加減すれば大丈夫さ。それより早くしないと手遅れにな  
る)  
(……分かつたの)

そつと、レイジングハートを握つて……

高町 なのは

橘  
司  
守

■ ■ ■

どうしようか……話のネタが尽きた。

ヒジヤナヒ。

唯一用意したのは魔道士かをかも直接聞けないし、いたら何もないうつて言われたし。どーしょ。

「シズくん、ごめんっ！！」

は  
い  
?

あれなのはさんいつの間に魔法の杖的な棒を？  
そしてなぜそれは天井を指してゐるの？  
なんで俺に向かつてくるのおおお！？

## 全 力 回 避

その勢いで転んでしまった。

### 絶 体 絶 命

「待て、待つてくれ。話しあえば分かるはずだ。金か？金が欲しいのか？」

「違うよー。」

「ならただ単に俺の命を……？な、何故だ！」

「それも違うよー。」

「じゃあなんだ」

「そ、それは……」

何故口にする。

まさか本当に……？

「えっと……早くトイレに行きたくて……つい？」

「その方法が殴るとか素晴らしいすぎる案に全俺が泣いた。後何故疑

問 符

（司守、封印出来たよ。足止めありがと）

（ナイスタイミングフェイト。そろそろ限界だつたわ。俺の命が）

後少し遅かつたら俺はあの魔法の杖の生贊になつてた。  
てか見せちゃつていいんですかなのはさん。  
魔導士の証拠じやないっすか。

「とにかくすまなかつた。一度としないからなのはも一度とこんなことしないでくれ

「「」、「ごめんなさい……」

急いでトイレに行く俺。

一瞬マジで出そうになつた。

何がとは言わない。

パンツが若干濡れてるのは気のせい。

橋 司守

高野 なのは

温泉出発のとき、わたしはすっごく落ち込んでました。

「結婚式に会わなかつたの……あの金髪の子が持つていつたのかな  
？」

ちやんとお話をしたかったの。

「……ねえ、なのは

「どうしたの？ コーノくん」

「昨晩……彼を氣絶するときなんでレイジングハートで直接殴りつ

としたの？」「

「え？ だつてユーノくんが言つたから……」「

「僕は“魔法”でつて意味で言つたんだけど」「

あつ……

## 第十一話 高町士郎のパーフェクト御神流道場（前書き）

前書きと後書きは必ずなにか書こうと思つて投稿したらネタがなかつたでござる

ちなみに後書きは『チート大図鑑』がないかぎり主人公と私の雑談になる予定  
べ、べつに質問とかあつたら答えてあげなくてもないんだからね！

## 第十一話 高町士郎のパーク御神流道場

「どうしたんだ？」  
「え？」

学校が終わり、誘われた通り高町家にお邪魔するのだが……案内役のなのはがどうもトーンショーンが低く過れる。

「元気ないぞ」  
「いややは……分かる?」  
「逆に分からぬ方がおかしい」  
「そつか……ごめんね」  
「別に謝らなくてもいいけどね……なんかあつたのか?」

そう言つとなのには暗い顔をしながら

「アリサちゃんとケンカしちゃつて……」  
「なんで?」  
「色々考え事して……それでアリサちゃんに自分達とこむのがつまんないのかつて」

考え方って十中八九魔法の事だよな……。

俺のことも教えちまうか?

でもそれだとグラントのことも教えないといけないし……。

「まあ……や、ケンカしたんなら仲直りすればいいじゃねえか」

「え?」

「ケンカなんか何時かはするもんだ。何回もな。ならいちいち悩んでないで何回でも仲直りすればいい。そうした方がよっぽど楽しく

過いりせるぢ

「……仲直り、出来るかな」

「当然だろ。お前ら親友なんだろ?」

「……ありがと'シズくん、わたしアリサカちゃんに謝るよー。」

元のテンションに戻つたなのはと会話しながら高町家に向かひ。

……あ、士郎さんのこと忘れてた。

「ただいま。お父さん、シズくんつれて來たよ」

「お帰り、なのは。久しぶりだね、司守くん」

「お久しぶりです、帰つてもいいですか?」

「はつはつは、面白い[冗談だね]

「冗談じゃないつす。

士郎さんめっちゃいい笑顔じやん。

嫌な予感しかしねえよ。

「じゃあ早速道場に行こつか」

早こよ。

「さすがに早かぎりなんじやないかな、父さん。せつかく来ててくれたんだから」

「む……わつか

「流石恭也さん、俺が思つてゐる事を代弁してくれる…  
そこに痺れる憧れるう…」

「……と言つたといふだけど、俺も父さんが認める程の才能を見  
たいんだよな」

「おお！なら早速行くか！」

俺を裏切つたなああああ…

\* \* \* じゅりゅく音痴のみでお楽しみトモ \* \* \*

「どうだい？私と恭也の試合は」

「人間の限界つてじつにあるのかと思つました」

「このぐらしちぐ出来るようになります。まあ基礎からやうつか

「あ、待つて下さご。正座してたら足が、んが…つあ、ちゅうが…

…」

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ…やります！僕も御神流を習つます…」  
「いい答えだ！行くぞ！」

「え、待つて基礎はぐへえ！」

「土郎さん……俺に足りないものが分かりました」「なんだい？」

「俺に足りないものは！それは！情熱思想理念頭脳氣品優雅さ勤勉さ、そしてなによりもおー速さが足りない！」

「御神流は速さが命だからな。ならこれは避けられるか！？」「だから速さが足りないってぐへえ！」

「ジドルザアン！」

「ん？」

「ギゾバドルジタン『ディスカー！オリバ、ギゾガナライタイ、ディス！』

「眞面目にやれ！」

「オンドウルラギッタン『ディスぐへえ！』

\* \* \* 以上音声のみでお送りしました\* \* \*

「……シズくん、大丈夫？」

「オデノカラダハドボドボダーハー」

士郎さんの嘘つき。

基礎からだつて言つたじやない。

実戦レベルの特訓じやない、これ。

「実戦に勝る訓練はない」

実戦をするために基礎があるのを忘れてはいけない。  
お陰で何度も床とキスしたことか。

ファーストキスはレモン味がよかつた。

「けど基礎無しでそこまで身体が動くなんて凄いじやないか」  
「恭也さん、誓めてくれるのは嬉しいけど無理にでも立たせようとする士郎さんを止めてください」

士郎さん、脇を持つて立たせないで。  
手を放した瞬間顔面強打するから、ツー！

痛い…………。

「しようがない、今田まじめにじよつ。少し休んでから帰りな  
れー」

やつと解放される…………。

初日からハード過ぎた…………。

「母さん、ビール」

「はいよ」

風呂上がりにそつとつて渡された子供ビール。

「まさか本当にビールを渡されるとは思わなかつた」

「今日高町さんの家で稽古してもらつたんでしょ。だから頑張つた  
」  
「褒美」

なんとも微妙なご褒美。

嬉しいけど。

飲み終わつたビンを母さんに渡して部屋に戻る。

余談だが橘院は一階建てで10個の子供部屋があり2、3人で一部屋使つてゐる。

ちなみに俺はバカ兄と同部屋だ。

「司守」

後ろから力サ姉に呼ばれた。

「どうしたの？」

「今日司守が頑張つたつて聞いたから誉めてあげよつと思つて。入  
つていい？」

「ん、いいけど」

力サ姉は甘えさせたがりだからな。  
俺もそれに甘えるが。

とりあえず部屋に入り、一段ベッドの下の方 上はバカ兄で下は俺が使ってる に腰掛ける。

すると力サ姉は俺の隣に座り太ももを二回叩く。

膝枕の合図だと分かると遠慮なく頭を力サ姉の太ももの上に乗せる。

関係ないけど膝枕って膝を枕にしてないよね。  
どう見ても太もも枕だよね。

そんなことより力サ姉の太もも柔らかいナリー。  
パジャマだからより太ももの感触を味わえる。  
静かに頭を撫でる手も気持ちいい。  
まったく、いい姉を持ったものだ。

そして、その気持ちよさに身を委ね眠りにつこうとしたときだった。

“また”あの感覚だ。  
しかも近い。  
多分いつぞやみたまに街中で発動してるんだろう。  
急いで起き上がるとして 力サ姉が俺の肩を抑え、妨げた。  
再び力サ姉の太ももに頭を乗せる。  
力サ姉の顔を見ると

「もう、いいんだよ」

まるで全てを悟つて居るやつに呟いた。

「司守がこんなに頑張らなくてもいいの。司守はね、もっと楽していいんだよ。もっと好きな事していいんだよ。無理に……辛い道を進まなくていいんだよ」

なんで力サ姉がこんな事を言い出すのかは分からぬ。

もしかしたら秘密に特訓してたのがばれたのかもしれない。

魔法に関わってるのがばれたのかもしれない。

何にせよ、力サ姉が俺を心配してくれてるのは分かる。

でも……俺も力サ姉やバカ兄、母さん……この橘院が好きだ。家族  
が大好きだ。  
だから

「俺、行くよ」

立ち上がる。

「なんで? 辛いだけだよ? 痛いだけだよ?」

「そもそもないさ。俺は好きな事をしてるんだよ、力サ姉。それが  
辛いわけがない」

部屋の扉を開ける。

「行つてきます」

「…………あまり、遅くならないでね」

返事を聞いた後、玄関まで走った。

「行かせて良かつたのか」

司守が出て行つた直後、まるで狙つたように博士が部屋に入つてき  
た。

「お前が一番反対してたじやねえか、あいつが“じつち側”に来るの」

「うん……今でも反対だよ  
「それでも認めたんだな」

「うん。 しょうがないよ司守が決めたことだもん。 尊重してあげたいよ」

私は“作り笑顔”をした。

私はいつも辛いとき、悲しいときほどの表情しか出来なかつたから。

「こういう生き方をしてたから、『帝』には平凡で何処にでもある幸せを掴んで欲しかった。

「そーかい。ハアー、せつかく二つ田と集めてる奴見つけられたの

「お願い! 多分、また司守が見つ  
に海にでも捨てとぐか」

「だといいけどな」

そのまま博士は出て行つた。

私は司守が選んだ道に幸せがあるなら、それを尊重したい。  
今はまだ分からぬ。

この運が幸か不幸かはどいて幸か不幸なのが  
けど、幸せかどうかを決めるのはあの子自身だから。  
今は……応援してあげたい。

橘  
量  
音

橘司守

- 1 -

「大は小を兼ねるのか、速さは質量に勝てないのか、いやいやそんなことはない速さを一点に集中させて突破すればどんな分厚い塊であのうと砕け散るう！」

ハツハツハツハツ、ハツー！ ドラマチック！ エスセティック！  
ファンタスティックランディング！」

頭の中で「テンションがおかしいの？」と聞こえたが氣のせい。

現在最速の兄貴の最速の状態で結界に侵入。

ハツハツハツハツの辺りで。

すると数秒とせずにフェイトを発見。

なにやら祈るような姿勢で手から光を発している。いや、正確には光るなにかを握っている。

フェイトの辛そうな表情、僅かに流血している手。恐らくジユノルシードを素手で封印するのだろう。察するに、状況もフェイトも危険だろう。

「ならー。」

そのままフェイトの元へ突っ走る。

「フェイトー。」

アルフの声でフェイトは俺の存在に気づく。だが既に俺はフェイトの前で脚を上げていた。脚のスリットが開く。

「衝撃のファーストブリットオー！」

最速の蹴りをフェイトの横に振り落として地面に当たり、コンクリートが砕け散る。

その余波でフェイトが吹き飛ばされた。

「きやああああー！」

「フェイトー。」

吹っ飛んだフェイトをアルフがキャッチ。

その間にフェイトが手放したジュエルシードに封煌布を巻きつかる。

「デス・リベルター  
煌縛鎮！！」

しばらく光り続けるも時間が経つにつれ徐々に収まり、地面に落ちた。

回収すると田の前にフェレットが。

フェレット？

「それをこっちは渡してほしい」

「喋るフェレットとはまた珍しいな。んー、文化的だ。だがな、これを渡す相手は決まっているんだ」

ジュエルシードをフェイトに投げ渡す。

「なつ……！」

「アルト！ フルトを連れて行けー！ このフェレットは俺が足止めする

「フェイトですー！」

「アルフだよー！ ってその声もしかして……」

「早くー！」

「ツー分かつたよー！」

アルト……じゃないアルフがフェイトを連れてどこかに飛んでいった。

「君は何をしてるのか分かつてるとかー！」

フェレットが睨みながら怒鳴った。

どうしようぜんぜん怖くない。

「分かっているさ」

「なら何故！？ジユエルシードは危ないものなんだ。ちゃんと封印して然るべき場所で保管しないと！」

「その然るべき場所つてのが管理局つてわけか

「そこまで分かってるなら……」

「生憎とそっちの事情は知らないし管理局のシステムはサッパリだ。だが例え知つてたとしても、俺は彼女に手を貸すだらう」「彼女は次元犯罪に等しい」とをしているんだ！」

「勘違いしてるようだから言つておくが、俺は彼女の知り合いで協力者だが特別親しい訳でも同情してる訳でもない。ただ単に、俺の信条に肩入れしてるだけだ」

大分時間も経つただうつ。  
足止めは十分か。

来た方向へと歩みを進める。

「待つて……ください……」

「なのは！？まだ動いちゃダメだ！」

なのはが杖をついて歩いてきた。

なのは居たのか。

ん？てことはこのフェレットはユーノか？

「大丈夫だよユーノくん……。それよりも……あなたはどうして……」

「フェイトちゃんに協力してるんですか？」

「言つただろう、俺は俺の信条に肩入れしてるだけだ」

「ジユエルシードは元々コーノくんのなんですか……返してくれませんか？」

やつぱりコーノか。

つかジユエルシードってコーノの物なのか。  
なんて物騒なもん持つてんだよ。

「それは彼女に言つてくれ、俺はジユエルシードを必要としてない  
からな」

そう言つてクラウチングスタートの姿勢を取る。

「待つて……！」

「じゃあな、このは」

「なのはで……きやあ！」

なのはが言い返す前にスタート。  
聞いてたらきりがない。

最終形態だつたからばれてないと思つが、なのははしづらく顔を  
会わせないようにしてよう。

アルフにはばれていたつぽいし。  
あ……御神流を習つともに会うか……。  
それ以外は氣をつけよつ……。

チート大団鑼／もう数を数えるの面倒くさい

【名前】

ラディカル・グッドスピード

【原作】

スクライド

【能力】

アルター能力

乗り物と自身の高速化

【その他】

速さを愛する漢のアルター能力

アルター能力の正式名称は「精神感応性物質変換能力」

自分の精神力により物質を原子レベルで分解し、「アルター粒子」に変換した後、特殊能力形態に再構成する特殊能力

ラディカル・グッドスピードは二つの特殊能力形態がある

一つはあらゆる乗り物を高速化

しかし相当無理をするのでアルター化を解くと爆発する

もう一つは自身を高速化

最終形態と脚部限定がある

最終形態は紫の鎧を全身に纏う

その速さは軽く音速を超える

脚部限定は最終形態の脚だけ

それだけでも十分強い

碧「兄貴かつこいいよ兄貴い！」

司「それは同感だが数を数える数を。なんだよ面倒くさいって」

碧「だつていちいち前回何回目か見るの面倒くさいだもん」

司「駄作者」

碧「重々承知」

碧「さあーて、次回の『魔法（中略）を護る』は」

司「司守です。……オイ、台本真っ白だぞ」

碧「未定です」

司「瞬殺のお……」

碧「いきなりそれかよ。多分某ＫＹ執務官道場か御神流の修行に入るかも」

司「かも？」

碧「まだ決まつとらんのよ。いつたんオリジナル入れるか原作通り行くか」

司「今のところは」

碧「ＫＹ６：御神３：他1ぐらい」

司「もうＫＹにしどけよ」

碧「えー、だつてＫＹだよ」

司「ＫＹなのは我慢するから」

？？？「へつくしょん！」

？？？「大丈夫？」

？？？「ああ、問題無い……がなにか嫌な予感がする」

？？？「んー、じゃあもしもの時の為に休んでれば？」

？？？「そうするよ。じゃあ後は頼んだ」

？？？「りょーかい」

第十一話 お決まり～ポロリはないよ～（前書き）

カーブスシーンはあるナビ

## 第十二話 お泊まり会へポロリはないよ~

(手に入れたジユエルシードを母さんに渡しに行くから、明日もじ  
ジユエルシードが発動したらよろしくね)

そんな念話をフェイトから受信した翌日。

特に変わることのない平日を過ぐすハズだった。

そり、だった。

「Oh……絶望のCarrioval……」

「やあ司守くん、今日は道場に来るのかい?」

はのな  
父、登場

「どうも土郎さん、奇遇ですね」

「ああ、翠屋の買い出しでね」

「それは大変ですね。応援しますよ。それじゃあ失礼します」

「ありがとう。それで道場に来るのかい?」

さり気なく逃げよつとしたら肩を掴まれた。

握力凄いよこの人。

「買い出しありうしたんですか?俺に構わず買い出しつけていい

ですよ」

「買い出しなんて神速を使えばどうか」とないわ」

御神流の奥義をそんなホイホイ使っていいんすか。

「すいません、今日は用事があるんでいけません」

「そりゃ……」

肩から手が離れる。

あれ？ 隨分あつさつ引き下が……

「多少強引でなければ君を口説けないか」

るわけがなかつた。

あと、それは某機動戦士に一日惚れした人の台詞ですよ。

「強引な人は嫌われますよ！」

後ろに向かつて全速前進。

「これは逃亡ではない！俺が自由を得る為の……

「では道場にこいつが」

なーんーでーれー。

「といひことがあったのよれ」

「あはは、司守くんも大変やね」

あのまま高町家の道場に連行される途中で桃子をここに会わなければ  
はやての家に訪れることはなかつたであらひ。

「こしても士郎さんはなぜあわしまでしつこのか

「あんまりサボつたらあかんよ?」

「サボつてねえ」

そもそも自分の都合が良い時でいこつて言つたの。  
それに俺を見る目がなんだか他の人と違つよつな  
まさかシヨタク……考えるのはよそう。

「そもそもなんでその士郎さんつて人苦手なん? 一応師匠なんやろ  
?」

「一緒にいたり常に御神流の話の上につひいきはG級だぞ  
御神流を習つのは押しに負けたとこいつもある。  
それ以外の理由もひやんとあるけど。」

「あたしも司守くんが稽古してゐる姿見たいなー」  
「断る。なぜ俺がボロボロになる姿を見せなきやならん

あれは稽古ではない。一方的にやられただけだ。

「えー……じゃあ今夜泊まりへん?」

「脈絡が眞無な件について」

「ダメ?」

「いや、多分平氣」

はやはにはいつも独りきりだから、誘われたら泊まる」といってゐる。  
もちろん許可を取つてからだが。

「電話借りるだい」

「うん」

受話器を取り、我が家電話番号を押す。

『はい、橋院です』

「あ、母さん?」

『司守?』

「うん。今日はやての家に泊まつていー?」

『今日へーん……』

「ダメ?」

『ダメじゃないナビ……』

珍しい。

母さんがこんなに悩むなんて。

たいていはやての事を知つてこるからOKして貰うのだが。

『……はやはちやんが家に来るのはダメ?』

「はやてが?」

『脹やかな方がいいと想ひナビ』

確かに……たまにはそつちの方がいいかもしね。

「なあはやて、逆にはやてが泊まりに行くのはどうだ?」

「おおむねいつ、同市くんの家」?」

卷之三

卷之三

詰めてゐるがから湯船にでるがる

卷之三

なんだと？」

元貴より先に彼女作るとほどハーバードだ話だぞ！」

「おめでと」

お姫は行こなかつてゐる

卷十七  
兒童  
行不十  
如并距  
而之  
上

はやてを連れて帰つてきた途端これだよ。

少しばし自重してほしいのだが。

「せやでやん……司守は頼りになる子だから、思いつきり頼つて

いんだよ」

「だから行かないよ、お嬢！？」

「来うへんの？」

「行かなよー!?

はやてまで何を言つてゐるの!?

本氣にするよー!?

「ええよ……本氣にしても」

ガツテム!

癬が治つてなかつたあああ!

「うるわこよ野郎共。お密わんの前で騒ぐんじゃない

奥から母さんが出でくる。

晩御飯を作つていたのかプロンをしたままだ。

「こりつしゃい、はやてちやん

「お邪魔します」

「邪魔なもんか。なんなら」」」を第一の家と思つていいんだよ」

そつと母さんは奥に戻つていく。

「相変わらず、ええ人やね」

「当たり前だ。俺達の母さんだぞ」

「……ちょっと羨ましいわ

「はやてだつて母さんを母親だと思つていいんだぞ」

「え?」

「母さんだつて言つてただる、第一の家と思つていいつて

「……うん、ありがと」

その後のた打ち回つてゐる兄貴達に濡れ雑巾を持つてきてもらひ、車

椅子のタイヤを拭いてリビングへ。

他の兄弟達もはやてを歓迎した。

元々お客を嫌がる人間はこの橘院にいない。

むしろウエルカム。人数が多い方が楽しいからな。

晩御飯ですら

「フウーハツハツハ、肉は貰つたあ！」

「最年少ブラザーズ！」

「ヒヤツハー！汚物は消毒だあ！」

「な、何をする……ヤメツ……」

「エハエエイメエエエエエンー！」

「アツ――――――」

これだからな。

いつもよりテンションが異常。  
あと、一人の将来が心配である。

「はい、はやてちゃん」

「ありがとうございます」

「足りなかつたら言ってね」

「いえ、十分です」

「ねえねえ、はやてちゃんつてさ、司守に勉強教えて貰つてるんだ

よね？」

「あ、はい」

「司守つて勉強教えるのほんつと上手いよね。小学生にしつくの  
が勿体無いよ」

女性陣も盛り上がりのようだなにより。

橋 司守  
……  
：

八神 はやて

……  
：

「それじゃあはやてちゃん、お風呂入りますか

「あ、お願ひします」

「」飯を「」馳走になつた後に量音さんにお風呂に入らせてもらひます  
なつた。

車椅子を押されて浴場に向かう。

ホンマなら司守くんがあたしの家に泊まる予定やつたから司守くん  
に入らせてもらひハズやつたのに。

そんなことを思つてたらすぐ浴場に着いた。

ちゃんと自分で服を脱いで量音さんに身体を洗つてもらい、湯船に  
浸かる。

今は量音さんが自分の身体を洗つている。

……乳デカいなあ。

「はやてちゃんはや、司守の事好き?」

「はい。好きです」

「素直だね」

「まあ暈音さんは負けますけど……」

うつと、暈音さんは身体の泡を流す。

……口があ。

あたしの背中側に来るように湯船に浸かり、あたしは暈音さんに寄りかかる。

足が不自由なあたしはこれが楽なのだ。

……乳デカいなあ。

「私は母性に近いもん。はやてちゃんは女の子として好きでしょ

?」

「えつと……まあ、はい」

そう答えると暈音さんはやっぱり、と言つて笑つた。

確かにあたしの……司守くんに対する気持ちはloveだ……と思う。

司守くんといふと楽しいしもつと一緒にいたい。

そもそもあたしは家にずっと一人だし、出掛けるのは病院とスーパーと図書館だけだし、司守くん以外によく会つてゐる人といえば主治医の石田先生ぐらいだし生活を支えてくれてる父の友人とは面識ないし……。

……多分、loveの方、かな?

「どうしたの？」

「いえ、なんでも……」

あかん、自分の気持ちが分からんなつてきた。

「司守はね、今頑張ってるんだ。みんなの為に」

「ぬるぬるあたしの頭を撫でながら量音さんは言った。

「もしかしたら頑張り過ぎて倒れるかもしれない。私達じゃ支えきれないかもしない。

その時は……はやひやさんが支えてあげて

お湯で濡れた手が濡れた髪を撫でたため、水滴が集まり首筋を通り浴槽の中に戻る。

それが数秒とかからなかつた様に、あたしの答えもすぐに出た。

「今はあたしが散々支えてますから、その時がきたらすーっと支えてあげますよ」

「……ありがとう」

また頭を撫でられる。

たまに司守くんに撫でられるのも好きだけど、量音さんも撫でられるのも悪くない。

まるで本当のお姉ちゃんみたいに思える。

……そりゃ。

「量音さん」

「なに?」

「やつぱり支えるにはおっぱいも大きい方がええですよね?」

「へ?えっと、おっぱいは関係無いと……」

「でも今あたしは量音さんのおっぱいに支えられてる……」

「それは支えるの意味が違う……きやあ!?」

「おお……手に余る大きさ、そしてこの柔らかさ……いつたい何を食べればこんな風になるんや!」

「ちょ……はやてちや……ダメ……そんな強くしちゃ……」

「ええじゃないですか。減るもんやないし」

「ひ、らめええええええええええ!…」

⋮

⋮

八神 はやて

橘 司守

⋮

⋮

⋮

「どひこひ」となの……」

そろそろ出たかなーって思つて着替え持つて風呂場に行つたら入り口で一人が倒れてるんですけど。え?なに?事件?

バーローで名探偵な小学生はいないぞ。

後力サ姉がなんかエロい。

パジャマがちゃんと着れてなくてハアハア言つてゐる。はやても似たような感じだけどそんなエロくない。

「これが体形の差か……」

「やつぱりおつぱにか！おつぱにか！」わいわいと走る子供たちの声が、耳に響く。

ハア ハア んつ 司守

？いつの間に

力サ姉もこちらに気づいて起き上がり

「ぶつ！カサ姉前！前隠して！！」

なんでブレジャ－していないの！？

「やつぱつおひさまーかーおひさまーが重要なんやなあああーー。」

三二、女見なしで、おおお

その後講話を聞かされたのはやまくらへ、まくらへ、まくらへ

やに怒られた。

俺が一体何をした。

## 第十二話 お泊まり会へ ポロリはないよ（後書き）

碧「流石主人公。ラッキーなスケベ」

司「うるせえ……あの後大変だつたんだぞ」

碧「いいじやないか、念願の暁音のおっぱいだぞ。爆乳だぞ」

せせり(必死)・せせらわいはいかえんかあああ・

は「あ、ちよ、久々の出番やからもうかい……」

司「九話以来だからそれほど久々じゃないから大丈夫！」

はーあたしかヒロインなんやろ！？たら毎回出せんかアホー！」

- 1 -

司「ふう……行つたか」

碧「そんな邪険に扱わなくても」

司「はやてに汚いものを見せたくない」

碧「それってどういった意味？」

司「今日はＫＹでも修行でもなかつたな」

碧「え？ 無視？」

司「今日はＫＹでも修行でもなかつたな」

碧「え？ なにこれ？ ドラクエ式無限ループ？」

司「今日はＫＹでも修行でもなかつたな」

碧「はいはい答えばいいんだろ…………。

実は次回どういう話にするか悩んでる時にフロイトがジュエルシード渡しに行くのを思い出して、じゃあつてこつなつた。反省も後悔もしていいない

司「散々待たせといてそれかよ…………」

碧「ドウドウ、純粋にスランプだつたんだ。許せ

司「最低ひとつ月一話にするつて決めてなかつたか？」

碧「そんな事を守れる訳がなかつた」

司「…………」

碧「無言でベル、ヴォルク向けんなよ怖い」

司「………… 次回は

碧「今度こそKYOU登場だ。

あ、読者の方に言つておきますが、いかがの予定でKYOU登場シーンは  
劇場版から抜粋させて頂きます

司「なんでわざわざ

碧「……フツ」

司「お、い、今のは、『それではまた次回へ』、ちょっと待てや、ゴルアアア  
アー！」

## 第十四話 原作が神だとアニメが黒歴史なる可能性が高い（前書き）

司「おいタイトルが本編と関係無いじゃねえか」

Fate/Neroとまじめとペルソナ4アニメ放送記念とこう」と

司「雪隣売ってるだろ」

んなこたあない

## 第十四話 原作が神だとアニメが黒歴史なる可能性が高い

「もうすぐなのヨー！」

「分かつたあー！」

学校行事やらなんやらのせいで下校するのが遅れた今この頃。  
いきなしふュエルシードの反応が。

人気の無い場所でチルルと黒服を出してフュエルシードの元へ急ぐ。  
ついでにラティカル・グッズスピード脚部限定も発動中。  
最終形態にしないのかって？

いや、そこまで急じやないし分解出来る物質が無かつたし。  
流石に学校の一部に大きな穴を開けるほど分解するわけにはね……？

「ちなみにフュイトとなのははもう廻るのヨー！」

「それを早く言えよおおおおおーーー！」

スピードヨー！

人に見つからないよつよつ、しかしどんどん上げて目的地に移動。  
すぐにつどり着いた。

流石最速。

見た感じなんかの一場のようだった。

夕焼けがやけに映えるな……。

「もう一人ともいるんだよな……。急がねえと……」

「もう一人来たのヨー！」

「なつ！？ 誰だ？」

「知らない人なのヨー！」

ちつ……マジで急がねえと。

工場の中に侵入。

するとすぐさま爆音が鳴り響いた。

数秒足らずで中心部に着くと煙の中からフェイトが。

フェイトの下へ行こうとした瞬間、煙の中からやたら青い光が

⋮

⋮

橘 司守

高町 なのは

⋮

「やめてえ——ツ——」

フェイトちゃんとの決着を邪魔した黒い魔導師の男の子が、アルフさんの手助けで逃げ出したフェイトちゃんを撃つた。

止めてつて言つたのに。

きっと煙が晴れたら、その場に倒れたフェイトちゃんがいるだろう。そんな予測を立ててフェイトちゃんを心配しながら煙が晴れるのを待つた。

しかし、いざ煙が晴れると予測と全然違つていた。代わりに赤い十一枚の円盤が、奥にいるフェイトちゃんとフェイトちゃんを撃つたとは別の黒い魔導師さんを守つていた。

「いい度胸してんじゃねえか、優男」

赤い円盤が魔導師さんの持つ柄に集まっていく。そしてその黒い魔導師さんの顔は、私がよく知つている人物だった。

「司守……？」

高町 なのは

橘 司守

……

「司守……？」

「怪我無いか、フェイト」

間一髪、ほんとギリギリだった。

チルルの円盤が飛ばなかつたから間に合わなかつた。

つか俺はギリギリ間に合わなかつた。

チルルを飛ばして攻撃からフェイトを守り、俺遅れて参上。

カツコ悪いな……。

いやいやそんな事どうでもいいんだ。

フェイトを守れたんだからそれでいいんだ。うん。

「誰だ君は」

フェイトを攻撃したつぽい黒い少年が杖たぶんデバイスを向けながら言った。

「人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るのが礼儀だろ?」

「僕は時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ! 君が何者かしらぬが今すぐ武装を解除し、後ろの彼女達と共に投降するなら、安全を保証しよう」

「俺の事知りたいの? 知りたくないの? どっちなの? つたぐ、

これだから最近のガキは」

「君の方が子供だろ! さあ、早く武装を解除するんだ!」

あーやだやだすぐ怒っちゃつて。

そんなガキには……

「お仕置きが必要だな」

「…抵抗する気か……」

チルルをクロノに向け、構える。

クロノも警戒して向けてたデバイスを盾にするように構えた。多分、いや、確實に強いだろう。

管理局やら執務官やら Bieber とてたから本職だろう。

(フュイト、アルフを連れて逃げる。どつかにいるんだろう)

(相手は管理局だ。一人じゃ……)

(俺は平氣だ。いくらでも手はある)

(けど……)

(母さんの為にジュエルシードを集めてるんだり? だったら早く全部集めてあげな)

(! ……分かった。でも無理はしないで)

俺は首を縦に振つて答えた。

それを確認したフュイトはジュエルシードを回収してから空を飛び、アルフと合流した。

「逃が……ッ！」

「そうは問屋が卸さないってね」

円盤を飛ばしてクロノの動きを止める。

その間にフュイトの姿は見えなくなつていた。

「くッ……」

「逃げんなよ」

「公務執行妨害だぞ」

「知らん。魔法が流行つてない場所で威厳振りかざすな」

「君も魔導師なら知つていいだろ!」

「いや、知らん。ググっても管理局の法律なんて出てこないだろ」

「ちゃんと調べろ!」

「無理だろー、どう調べられて捕つんだー」の繫縛プレイヤー「アー」

「はあ？ なんの……」

なのはの手足拘束してゐるへせ。」

「つてアレは違つーー。」

「へ？ 私？ きんばくふれいつて？」

ピコアなのはは知らなくていいの。  
間違つても家族に聞かないよ。」

「隠すなよ。変態執務官」

「違つて言つてゐだろーー。」

「どうせフェイトを狙つたのもあのスク水姿田當てだな」

「だから違つーー。」

そんな息を荒げてまで興奮してゐる。」

「君の所為だー。」

「えつーー、まさかそつこつ趣味……」

「……もういい、君を重要参考人として連行する」

ねえせめて否定してよ。

狙いを俺にする田的だつたからいいんだけどさ。

「ステインガーレイー！」

『Steiner Ray』

つていきなりかよ！

青い光が高速で俺に襲いかかる。  
チルルを盾にし青い光を防ぐと

「来るのヨー！」

その声に反応して真上に飛ぶと俺がいた場所にはバインドが表れて空を掴んでいた。

チルルが反応してなかつたら確実に捕まつていただろう。  
撃つた本人もそれで仕留められると思っていなかつたようで、しつかりと俺を見据えていた。

「スティン……」

「衝撃のファーストブリットオ！」

魔法を使われる前にこつちから攻撃。

『Protection』

チャージから攻撃に移るまで一秒もないこの技は見事にクロノの魔法を阻止し、防御させた。

防御させるつもりはなかつたのに。  
どうやらデバイスはオートで防御するらしい。  
チルルに近いものを感じる。  
厄介だな。

結局相殺し距離を取る事になつた。

「今の技はこの間の……！」

「あの時の紫仮面さんつてシズくんだったのーー？」

あ、バレた。

つか紫仮面つて。

紫なのは全体的に……いや、どうでもいいか。  
これからは本氣出す。

「狩獵の福音は鳴った」

円盤が俺の上に縦に円を描く。

『愛しきやし』

『歌……？』

『すげなき汝にまじくじす』

クロノが警戒してか防御、または回避か反撃の準備をする。

『健よきのがなつ驕きこね濃い』

だが防御を碎いて回避も読んで反撃する暇も見えない。

『石火の瞬き』

この一撃で終わらす！

『あややかにせん！』

クロノもこの攻撃に気づいたのか空へ飛び離れようとする。

もう遅い。

『フェルナンドネイア  
鋼鉄惑星！』

十一枚の円盤が一列に並び弧を描きながらクロノを襲つ。

必死に避けようとするクロノより速い速度で追う円盤は、次第に列を崩し、まるで獲物を覆つよう広がつた。

避けきれない悟つたクロノは円盤と向かい合い防御魔法を使って円盤を防ぐ。

しかし防御魔法が円盤を防いでいる間に残りの円盤が背後に回り込み、ロターンして再び狙いを定める。

「なつ……ぐあ……」

「終わりか？」

遅れて反応するもクロノは攻撃をモロに受け地面に呑みつけられた。

円盤を柄に戻しワザと見下す様に倒れているクロノに立つた。

「まだ……まだ」

睨みながら立ち上がるが足はまだ膝がついたままだつた。止めを 気絶させみつとチルルを振りかぶる。

『待つて下さい』

田の前に急に半透明な画面と画面の中に縁の髪の女性が現れた。

これも魔法なのか……？

いやー最近の魔法は進歩してますなー、つてレベルじゃ無いんだが。

「母さ……提督……」

「提督？」

提督つつーと結構偉いんじゃ？

『初めまして、私は時空管理局提督、リンクティ・ハラオウンです』

『何故提督が……』

『クロノ執務官はトトがつて下さい』

『しかし…』

『クロノ』

『うう……』

クロノを抑えるコンティさんは上向よつもなんだか母親のよつな感じだった。

「もしかして親子？」

『あ、分かります？』

『いやまあ、名字が一緒だしなんか雰囲気が……』

そう答えるとそうですか、と微笑んだ。

美人だなあ。

こんな頭固そうな奴の母親とは思えないわ。

そう思ったのも束の間で次の瞬間には真面目な顔になつた。

『さて……まずは名前を聞いても？』

『福本育郎。あだ名はヨンパチ』

『え、なに言つてゐの同守くん？』

バーロー何早速バラしてんだよ緊縛少女。

「だからさあばくつてなにー?」

ググれ力。……やっぱググらないで。

『では司守さん、出来れば我々の船で詳しいお話を聞きたいのですがよろしいですか?』

「その船は宇宙戦艦的なアレですか?」

『宇宙ではないですが、似たようなものですね』

くつ……ロマンが溢れてるじゃん……行きたい。

「すゞく行きたいですが遠慮しちゃいます」

『なぜ?』

「俺は彼女側ですか?」

後ろに跳んで全員から距離を取る。

「待つて、司守くんー!」

「待たない」

“朧”と書かれた一枚の布をグラントの能力で生み出す。その布を自分の身体に巻いて、“消える”。

「消えた!?」

「な、なんでー?」

魔道具・朧。

光を調整して透明になる布だ。

と言つても朧自体の汚れは透明にならないのだが。ここから去るのは十分か。

「じゃあなクロノ、リンクトライさん、なのは」

「膽に身を包んだまま俺は帰った。

なのはは多分大丈夫だろつ。

あいつらが時空管理局なら何かしら質問されてもすぐ解放されるだろうじ。

今は自分の身の心配だけだ。

## 第十四話 原作が神だとアニメが黒歴史なる可能性が高い（後書き）

チート大図鑑

【名前】

朧

【原作】

烈火の炎

【能力】

透明化

【その他】

光の屈折率を透明レベルまで弱める布

原作では暗殺や敵を翻弄するのに使用していた  
しかし朧に付いた汚れは透明にならないのが弱点

司「今期で見るアニメは？」

碧「前書きの三つだる。後は僕は友達が少ないとシーキューブだな。  
今更だけど星空へ架かる橋も見たい」

司「何故に」

碧「ヒロインの一人がどう見てもシグナムさん」

司「誰？」

碧「ああ、お前はリリカルの世界を知らない設定だったな  
司「設定言つな！」



## 第十五話 ドキドキ保健室 壣人公を奪こむつたのアヒ駄のナ（！？）

「忘れてた……」

「ちやんとお話を聞かせてもらひつの

なんで普通に登校してるんだろ俺。

時空管理局が無事になのはを返したなら俺に会いに来るのは当然だ  
る……。

あたしつて、ほんとバカ……。

「聞いてるの？」

「あーはいはい聞いてますよー」

「それは聞き流してるつこつこの

「あ、フロイト」

「えー？」

嘘です。

なのはが一生懸命いないフロイトを探している間に魔界召喚。  
瞬く間に透明に。

「どういフロイトちやんが……つていなーのー。」

まだ田の前にいるよー、なにて言えるわけないので透明のまま黙つ  
て登校。

つてもまあなのはがそう簡単に諦める訳もなく、

一時間目終了。

「四六八九二九一？」

卷之三

「アーヴィング」

「噓！？」

「うん、  
嘘」

朧召喚。

「また騙されたの――――――！」

一時間目終了。

「何が何だかわからん！」？

ヘリ！？

「五」

「フロイトのやんならいなーいよ。ちゃんと確認したもん」

「え?  
クロノくん?」

臍凹喫。

「いなこよクロノベ……またなの――――――」

三時間（マツケン）

臍凹喫

「司守くそ…… うでもいひこないの――?」

昼休み

「流石ヒヒヒヒヒヒヒヒ」

「ならお話を聞かせてほしこの」

「どこな……。

「じゃあちよつと手握つて」

「? 分かったの」

「アハハ。」

「おまなしだ」

「…………」

なに黙つてゐるんだよ。

お茶の間はぼーんだぞ、木つ端みじんだぞ。

「ねえ司守くん、私本気なんだよ」

「……それは分かる。分かるんだが徐々に力入れてないか?」

「どうしたらフェイトちゃんとお話できるか、本当の気持ちを聞か  
出せるか」

「それは良いことだが力を抜いてくれないか? めつた痛いんだが  
「頼れるのは司守くんだけなの! お願ひ、フェイトちゃんのこと  
教えて!!」

「その台詞は一度言られてみたかつたけど手を握り潰されながらは  
聞きたくなかった! お手々離してえええ!!」

「いや! そうしたら司守くんどうか行つちやうむん!」

「それも別シユツで聞きたかったあああ!!」

絶対魔法で握力強化してゐるだろ!

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!

手が握り潰されるう!!

「あ、こんなとこにいた」

「なのはちゃんもうお昼食べちゃつた?」

「アリサちゃん、すずかちゃん」

手の力が弱まつた!

今がチャンス!

「脱出!」

「あ!」

「ありがとアリサ、今は君が天使に見えるー。」

「うわキモー！」

「ぶつーーー。」

司守は めのまえが まつへらひ なつた。

「知らない天井だ……」

「司守くんって保健室来たことなかつたっけ？」

ああ、保健室か。

あんまり来たことないや……って

「なぜに？」

「司守くんが逃げたらアリサちゃんの右ストレートが直撃して気絶したから、わたしが運んだの」

アリサ＝……。

「納得。どうりで右手が温かいわけだ、看病ありがと。手を離してくれ」

「いやなの」

「なのは、言うこと聞きなさい」

「お母さんみたいに語りてもダメなの」

「ん……。

結局俺はこの魔の手からは逃れられないのか……。

「お願いだからお話を……」

「話はこっちで聞かせてもらおう」

「え……？」

「なんだと……？」

「何もない所からクロノが。  
なにこれこわい。

もしかしたら入浴中に突然クロノが現れる可能性も……。

「きやー、クロノさんのおつちー」

「なんの話だ？」

「どうしてクロノくんが……」

「悪いが君を解放した後、サーチャーで監視させてもらひった」

「マジでエロがつた！」

「なんかこっち来たあーー！」

「くたばれ覗き魔ーー！」

「ぶつーー！」

渾身の左ストレート！

無様な悲鳴を上げてクロノは気絶した。  
ざまあ。

「クロノくんーー？」

手の力が弱まつた！

今がチャンス！

「今ど！」

「逃がさないの！」

出口まで後数歩の所で身動きがとれなくなる。

「見ればビニール袋が身体を纏め作れりに力つまれば脱出手段。

卷之三

「カソダジンズロードーン」の話、聞かせてもらひの

この状況をよく考えればきっと脱出出来るはずだ。

まず今俺は扉の数十センチの所でバインドに動きを止められている。足は動くが上半身がまるで空間に張り付けられた様に動かない。手首と首も動くからなんとか後ろのなのはの様子も分かる。さつきまで俺が寝ていたベッドの横にいる。

多分警戒しているのだろう。

とつぐに下校時間だ。

バインエを発動せよとのせなのはだから絶対に叶はねまい。」  
「……。」

女の子に乱暴するのもねえ。

「お願い。フュイトちゃんのこと聞かせて」

……しかたない、気絶させるか。

「なのは、言ひておきたい」とがある

「なに？」

「ネギトロのネギは野菜のネギって意味じゃなくて

「

バリィイイイイイー！――！

「きやああああ――！」

「のわあ――！」

急に保健室の窓ガラスが割れ外から電撃が保健室の約半分を襲つた。その衝撃でなのはは気絶。

クロノはなんかビクンビクンしてゐる。無視しよう。

「司守、平氣！？」

「フュイト？」

割れた窓からバリアジャケットを着たフュイトが現れた。

「どうしてフュイトが？」

「ジユエルシードを探してたら魔力反応があつて、来てみたら司守が捕まつてたから……あと管理局の魔導師もいたし」

なのはとクロノを見る。

二人とも気絶しているが涙田である。

なのははクロノがいなければ少なくとも電撃はなかつた訳だし、クロノに至つては気絶中に感電。

あ、学校も涙目か。  
なんともいえねえ。

「司守は怪我なかつた?」

「ああ、まあありがと、フロイト」

「」のままじや誰か来るし……よかつたら、家来る?」

なに頬染めながら素敵な言葉を囁つてゐるの?

萌えるじやない。

しかもその姿だと余計に……」  
「ねー

「じゃあ、お願ひしようかな」

「なり早速行け。アルフにも連絡しておくれ

「でもジユノルシードはどうすんだ?」

もともとそれ目的だつたわけだから手伝ひなうまだしも中断せざる  
となると後味が悪い。

「また夜か明日にやるよ。司守には助けてもらつたしね」

そう言つて手を取るフロイト。

すいぶんナチュラルに手を握りますな。  
されだけ好感度が上がつたのか。

そしてそのまま割れた窓に近づく。

「つと、ちよつと待て」

手を繋いだまま窓をフロイトに被せる。  
その後もう一枚牖を生み出し被る。

「え！？ 司守が消えた？」

「フェイトも同じだからな」

「え……ほ、本当だ……なにしたの？」

「ん……ま、俺の魔法つてことで」

「稀少技能つてこと？」

「なにそれ美味しいの？」

「食べ物じゃないんだけど……後で説明するよ」

離すとどこにいるのか互いに解らなくなるので手を握つたまま飛行。

にしても見えないものに手を引かれるつて結構怖いんだな。  
相手がフェイトつて分かつてるからいいけど。

引かれるままに移動しているといつの間にか街に入っていた。  
朧のおかげで下にいる人達から見えないので、気にしなくてもいい  
のだがなんだか悪い事してる気分。

え？ 悪い事してるつて？

ちょっとよく分からなきゃかな。

管理局？ ジュエルシード？ 知らないな。

無数のビルの一つの屋上に降り立つ。  
自分の足も見えないので若干苦労した。

「！」が私達の拠点。 結界が張つてあるからもう大丈夫だよ

なら一安心。

朧を脱いで手足を伸ばす。

「えっと、この布？ を外せばいいの？」

「ああ、やうだ」

フェイトも臙を脱いで姿が見えるようになる。

その後臙を返してもらい、バリアジャケットを解除した。

フェイトを先頭にしてビルのに入ると、無数の部屋の中から一つの部屋に案内された。

「お帰りフェイト」

「ただいま、アルフ」

「司守もいらっしゃい」

「お邪魔しまーす」

部屋の中にはアルフがいた。

椅子に座りながらドッグフードを食べているのには突っ込んだ方がいいのか？

「適当に座つて」

と言われたのでとりあえずアルフの隣に座る。

「あげないよ

「いらん」

人間は好き好んで食べないぞ。

アルフがどんな種族なのかは知らんが。

耳と尻尾があるから少なくとも人間じゃないよな。

改めて部屋を見る。

正直かなり広い。

テレビが遠くに見えるし。

こんだけ広いと逆に大変そうだよな、家事。  
ちゃんと一人でしてんのかな？

……率先して掃除するフェイトに面倒くさがつてもしつかり付き合うアルフを想像したら自然と頬が緩んだ。

「どうしたんだい？」

「いや、一人つて姉妹みたいだなーって思つて」

フェイトが姉でアルフが妹だけど。

一見デコボコだけど、しつかり者の姉にやんちゃで姉思いの妹。  
理想的な姉妹だと思つ。

「姉妹、ね。だつたらフェイトが姉であたしが妹つてところだね」「自覚あつたんだな」

「まーね。何だかんだでしつかりしてるからね、フェイトは。今回  
だつて……」

そこでアルフの顔が急に暗くなつた。

「どうした？」

「べつに。あー、お腹いっぽいになつたら眠くなつちやつたよ。ち  
よつと寝てくる」

ドッグフードを机に乗せてアルフは出て行つてしまつた。

「あれ？ アルフは？」

「なんか寝るつて」

机の方へ座り直す。

お盆の上にティーカップを乗せたフェイトには突つ込んだ方がいい

のか？

ティーカップの一つが田の前に置かれる。

「『めんね、本当はお菓子とか出した方がいいんだろ？』など、そういうつて買わないから」

「なんのなんの」

せっかくの『』好意なので一口飲む。

本当は紅茶つて苦手だけど飲めなくもない。

そういう場合は我慢しとくのが日本人のび

「リングゴジュース……だと……？」

「あ、嫌いだつた？」

「いや、普通に好きだけど」

お盆とティーカップとリングゴジュースつて何かおかしくね？

あれか、まだ日本慣れしてないんだな。

もしかしたら別の世界の生まれかもしれないから地球慣れすらしてない可能性もあるが。

まあ後は稀少技能やら日本での生活やら話したら七時になつちやつた

「すいません、ホントすいません連絡忘れてました。……え、『』飯はまだだけど……すいません、すぐ帰ります」

こつてり怒られました。

当然だよねー。小学生がこんな時間まで無断で外に出てたら普通怒

るわ。

ちなみに電話はフロイトの家のを借りました。

「どう説だから帰るわ。電話ありがと」  
「うう、むしむめんね、こんな時間まで引き止めやつて」  
「管理局には氣をつけるんだよ」  
「分かってる」

「ぞとこつときはなんか出して逃げるからな。

最後に一人に手を振つて部屋を出た 床つてきた。

「どうしたの？ 忘れ物？」  
「それは多分平氣だ。ただ聞きたいんだが……」  
「なにを？」  
「出口つてビード？」

せめて屋上を教えて……。

## 第十五話 ドキドキ保健室 主人公を奪つた女の名と男の子（！？）（後書き）

碧「驪が有能過ぎる件について  
多分これからは出ないと思っています」

司「本当だ？」

碧「たぶん、きっと、おれらしく、めいびー」

司「怪しいな……」

碧「でもこれからは戦闘が増えてくるから、少なくとも出番は減る  
ぞ」

司「うへえ……マジかよ」

碧「では今回は今までで～」

碧「zeroのバーサーカー戦が格好良すぎる件について」

司「どうでもよいわ！」

## 第十六話 シリアス回はネタが出来ない（前）

「あああああ！ また消えたあ…… どうして？ 何で！？」  
「はあ、またか……」

次元航行艦アースラ。

時空管理局が所有する船艦の内部の一角で、一人の男女がモニターを眺めている。

「せっかく透明化に気付いて対策考えたのに！」  
「考える間に別の逃走方法に変わつてたか…… 失敗したな」  
「なにこれ！？ 影の中に入るレアスキルなんて聞いたことないよ！」

「落ち着け、エイミー」

「これが落ち着いていられるか…… 私の睡眠時間返せ……！」

エイミーと呼ばれた少女は手足を伸ばして大声で叫んだ。

彼女はモニターの少年 橋司守がなぜ急に消えるのかに真っ先に気付いた。

それはレアスキルによる自身の透明化。

彼はレアスキルと呼ばれる通常の魔法とは別の特殊な固有技能により、管理局に気づかれずにその場から離脱したとエイミーは考えた。それに対する試行錯誤を睡眠時間を削つてまで行い、やつと完成し導入した瞬間、彼は別のレアスキルによって痕跡を消したのだ。そりや叫びたくなる。

「これはもう諦めた方がいいでしょうね」  
「艦長！ 私の努力を水の泡にするつもりですか？」  
「そうは言いません。しかし、また対策を考えるより、残りのジユ

エルシードに専念した方がいいでしょう

「艦長の言う通りだ。無いだろうが、また別のレアスキルを使われたら躊躇こにしかならない」

「クロノくんまで……。もう、分かりましたよ。残り六個のジュエルシードの探索を優先しますっ！」

納得しない様子でエイミーはモニターに向かつた。  
しかめつ面のエイミーをその場にクロノはこの船の艦長であり、自分の中の母であるリンディ・ハラオウンに近づく。

「艦長、彼の事ですが……」

「司守さんね……なのはさんの話しを聞く限りいい人そうだけど」「あまり感情移入されでは困ります。事件の主犯の一人なんですよ？」

「分かっています。だからこそ、エイミー執務官補佐を中心に技術者の方達に彼の追跡を指示したのです」

司守はクロノと学校で接触した後も学校へ通い続けていた。  
ならば彼の後を追えばフェイトと一緒に逮捕出来るのではないか、と考えたのだが実際はそう上手くいかない。

毎日登校していくも学校にいる間しか彼を追跡できないのだ。

サーチャーで彼を見ていてもいつの間にか学校におり、下校時も目の前で消える。

とどのつまり、学校内でしか彼の様子を見ることは出来ないのだ。

数日費やした対策もたつた今失敗したばかり。

後はフェイトとアルフと呼ばれる使い魔と出て来た時に現行犯逮捕するしかない。

もつとも、それも難しいのだが。

いくらなのはとユーノがアースラに泊まってまで協力してくれるとはいえ、こちらに自由に動かせる熟練者はクロノ一人だけ。

それ以上は戦力過多になりかけない。

対してあちらは子供とはいえ熟練者一人にその使い魔と変幻自在の  
レアスキル持ち。

勝ち目は薄い。

残るジュエルシードは六個。

フェイト達が八つで自分達は七つ。

相手より早くジュエルシードを封印しなければ

「艦長！」

エイミーが大声でリンクティを呼ぶ。

先ほどの叫びとは違う、切羽詰まったような声だった。

「どうしました？」

「例の三人が出現しました！」

「なんだって？」

「モニター、写します」

他のモニターより一際大きいモニターが開くと、海を目の前に二人の男女と一匹の獣が宙に浮いていた。

……  
クロノ・ララオウン

橘 司守

……

⋮  
⋮

遊んでいた子供達が帰り、静かになりつつある公園。  
無数に生えている木の一本の影が途中から手で紙を破るように離れ、  
その影は少年になった。

「便利だな、これ」

少年 司守の手には三本の爪が乗せられた『影』とかかれた  
玉があった。

玉の名前は影界玉。

影から影へ移動したり、遠く離れたものを見る事が出来る魔道具。  
影そのものを操る事は出来ないが便利な魔道具である。

「陽炎ママが愛用するのも納得だな」

本当は今日も隕で監視をやり過ごすとかと思つたんだが、隕は姿が  
消えるだけなのだ。

無いと信じたいが魔法モノのストーリーには大抵、溢れ出る魔力で  
後を追うなんて芸当がある。

そんなものに隕を使つても意味無い。

まあ、すでに使われてたらそれこそ意味無いが。

だが、あの日以来管理局が現れないのが使われていない証拠だから  
大丈夫だろう。多分。

影界玉を消してフェイトとの約束の場所へ向かう。

数日前、ジュエルシードを回収した後フェイトがこんなことを言い

出した。

「だいたいジユエルシードも集まってきたね」

「全部で八つか……後どのくらいだ？」

「多分六個ぐらいかな。後は管理局……あの子が回収したと聞いた」

あの子ってのは恐ろくのはの事だろ？

なのはもフロイトの事気にしていたし、フロイトもなのはで会った  
び何か思ひよめり見てるじ。

「ちなみにその六個もだいたい見当つこてるよ

「お、マジか」

「うん、だから管理局の邪魔が入らないようにしておけりと黙つただけ  
ど……今週の金曜日でいいかな」

「ああ、平氣だ」

はやてとの約束も無いしな。

「じゃあ、金曜日に。それまではゆっくり身体休めて

「ア解

つてな事があり今日、つまりは約束の金曜日に至る。  
そんなことを思い出しながら公園の中の林を進んで行くと、丁度海  
が見える所でバリアジャケット装備のフロイトと宝石が生えた赤毛

の大型犬が待っていた。

「遅かつたね」

「犬が…喋つた……？」

「犬じやない！」

赤毛のワン公はみるみるうちにアルフに。

「アルフって犬だつたのか」

「だから違うって言つてるだろ！ 狼だよ、あたしは！」

「似たようなもんだる」

「違う！」

「二人とも、そろそろ」

フェイトの声で司守とアルフは黙る。

二人から距離を取り、自分のバリアジャケットを着て右手にはいつ  
もとは違う、蟲の様な籠手を生み出した。

いや、それを籠手と呼ぶには冒涜にも等しい。

自らの意志を持ち、その脚その尾で司守の腕に抱きつく。  
それは間違ひ無く生きていた。

『……よもや、ワシを呼ぶとは思わなかつたぞ』

蟲と呼応する様に一匹の獸も現れた。

鋭く太い角を持ち背中の全てを覆うほど長い体毛。

どの生き物にも当たはまらないその獸は、最高傑作とうたわれた一  
つだった。

名を『雷神』

使用者を道具として使う凶悪な魔道具だ。

『クックククク……ワシを使つほどとは思えんが、その身存分に使わせて貰つぞ？』

「ざけんな。誰がてめえなんかに身体渡すか」

『なに……？』

「俺はお前に身体を預けるつもりはない。このまんまで使われてろ」

俺と雷神が睨み合つ。

雷神は明らかに殺氣をぶつけていい。

殺氣慣れしていない俺は正面から受け止める。

同じく殺氣慣れしていないとはいえ戦闘経験豊富なフェイトやアルフですら、真正面から受けたら微塵も動けないほどだった。体感時間では十数分たつたと思えるほど一人は睨み合つていた。そして、

『よいだろう。そこの小娘と子犬どどいまでやれるか見させて貰おうか』

そう告げて雷神は消えた。

肺に溜まつた二酸化炭素を思いつきり吐き出す。

後から冷や汗がジワジワと皮膚から流れ出した。

「司守、今のが……」

「そ、あれの力の一片を使って強制発動させる」

今日の約束をした後に念話で作戦会議もしたのだ。

数時間による話し合いで決まった作戦は至つてシンプルだった。

まず俺が高エネルギーの塊をジュエルシードがあると思われる海へ放つ。

ジュエルシードが暴走した所をアルフが抑えて、その間にフェイトが封印するというものだ。

そのために用意したのが雷神だ。

広範囲かつ高威力。その条件を満たすのはたくさんあつたが、雷神を選んだのはあくまで道具だから負担が一番小さいからだ。最も雷神に使われれば負担は大きいが。

「さて、準備はいいか？」

「うん」

「まつかせな！」

アルフは狼状態に戻つており、フェイトもデバイスを握る手に力が入つていた。

三人は魔法で飛び、俺とフェイトは沖まで行き、アルフは一人より後ろで止まつた。

自分達も止まり、大きく息を吸う。

大丈夫、いける。

二人の為にも今回も必ず成功させなければならない。

雷神がある右手を海に向ける。

「……狂雷」

雷神から放たれた無数の雷は怒り狂うが如く、海を覆つた。

雷はハつ当たりのように海へ降り注ぐ。

雷が落ちた周囲の魚などはとつくに死んでいるだろう。しかし仕方ない事だと割り切り雷を注ぎ続ける。

すると反応はすぐに現れた。

眠っていたジュエルシードは天候を崩し、それぞれ海を巻き上げ竜巻を作り上げた。

その数六つ。丁度残りのジュエルシードの数と一致する。

「アルフ！」

「分かつてゐる！」

アルフの足元に橙色の魔法陣が現れる。

魔法陣の中から更に六つの鎖が現れ、竜巻を締め付けた。

置み掛けるようとフェイトが竜巻に近付こうとする

が、如

何せん風が強すぎてバランスが取れない。

やや離れた所にいるアルフは平気そうだが、中心に近い場所にいる俺とフェイトは動こうにも動けなかつた。

ジュエルシードの力を舐めていたかもしれない。

一つ一つは対処出来る程度だつたが、複数集まつた威力は計り知れないものだつた。

『存外苦戦しているではないか、主よ

唐突に目の前に雷神が現れた。

『どうする？ ワシに使わればどうにかならんでもないぞ？』

雷神の口角が歪む。

雷神に使われるといふことは生命力と身体の自由を奪われるといふことだ。

しかしこの状況を開拓するにはそれしかないかもしれない。

アルフはジュエルシードを止めていて、フェイトは封印をしようにも出来ない。

だが俺が雷神に使われば事態は一変する。

……後は、任せるしかない。

「雷神……体内への侵入を……」

「フロイトちゃん！ シズくん！」

その時、風や雨が荒んでいいなか確かに聞こえた。  
久しく聞いていない友達の声を

## 第十六話 シリアス回はネタが出来ない（前）（後書き）

### チート大図鑑

【名前】

影界玉

【原作】

烈火の炎

【能力】

影から影へ移動

離れた場所を見る遠目

【その他】

密室であっても影さえあれば脱出し、遠目によつて相手の様子を見ることが出来る便利な魔道具

これ自体には戦闘能力は無いが策略に長ける者が使えれば非常に強力  
原作では主人公の母親である陽炎が使用  
本人がくノ一で知略や体術に優れているので、敵の影へ移動後瞬殺  
とさり気なく活躍している

余談だが助けた子狐に懐かれる陽炎ママ可愛い

【名前】

雷神

【原作】

烈火の炎

【能力】

雷の操作

生命力を吸い取られることにより雷の強化

【その他】

魔道具の制作者の一人、海魔が作った最強の魔道具  
海魔が殺戮を目的に魔道具を作っていた為凶悪な性格になつていて  
見た目はグロテスクな蟲

尾のようなものを使用者に刺して生命力を吸う

意志ある魔道具はあるがその中でも珍しくもう一つ姿を持つ  
他の姿を持つ魔道具は対となる風神以外作中では明らかになつてい  
ない

しかし使用者を逆に使う雷神は最も珍しいだろつ

碧「魔道具無双な件について」

司「結構便利なの多いしな。後お前烈火好きだし」

碧「よせよ照れる」

司「どこに照れる要素が」

碧「個人的には火影より麗のメンバーの方が好きだつたり」

司「聞いてねえよ」

碧「では本編の話しだ……実は前編後編分けるつもりは無かつたの  
ですよ」

司「じゃなんぞ」

碧「それが書いてたら結構長くなつしぃだつたんで急遽こうこう形  
に」

司「そのままだつたらどうなつたんだ?」

碧「多分七ページは行くかと。一話二、四ページぐらいでいきたい  
んだよね、俺」

司「あー……なるほど」

碧「後編は近いうちに上げる予定です」

司「楽しみにしてる人はいないと思ひながらお楽しみに」

碧「オイコラ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5627t/>

魔法少女リリカルなのは 転生した少年は少女達を護る  
2011年11月17日20時22分発行